

TOTO 通信

2012年 春号

Toward a Creative
Architectural
Scene

あ
ら
た
め
て
デ
イ
テ
ー
ル

特
集

Special Feature On Details

TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 496
Spring 2012

Contents

特集

Page

座談会+ケーススタディ

4

「おまえは柱か、 おまえは壁か」

矢板久明さんと矢板直子さんに
新聞謙一郎さんが聞く、建築とディテール
「八雲の家」「PATIO」

ケーススタディ1

16

光のディテールで 場をとらえる

「関前の家」八島正年+八島夕子

ケーススタディ2

26

黙せよ、ディテール

「弘中邸(多面体 東京)」横河 健

ケーススタディ3

36

“フシギ”を宿す スケールとディテール

「宇治のアトリエ」長坂 大(建築)+宮城俊作(外構)

シリーズ

旅のバスルーム 83	文 スケッチ/浦 一也 アマンガッラ(スリランカ ゴール)	46
現代住宅併走 19	文/藤森照信 穂積信夫の「自邸」	48
最新水まわり物語 29	伊万里有田共立病院	54
地域に生きる会社 56	欧倫ホーム	58
TOTOギャラリー 間で展覧会をします	伊丹潤展「手の痕跡」	60
news file		62

「TOTO通信」を
インターネットで
ご覧いただけます。

TOTO Web Site

www.toto.co.jp

表紙写真/「八雲の家」のファサード見上げ(3~15ページ参照)。
写真/藤塚光政

編集制作/中原大久保坂口編集室
デザイン/岡本一宣デザイン事務所
印刷/ゼネラルアサヒ

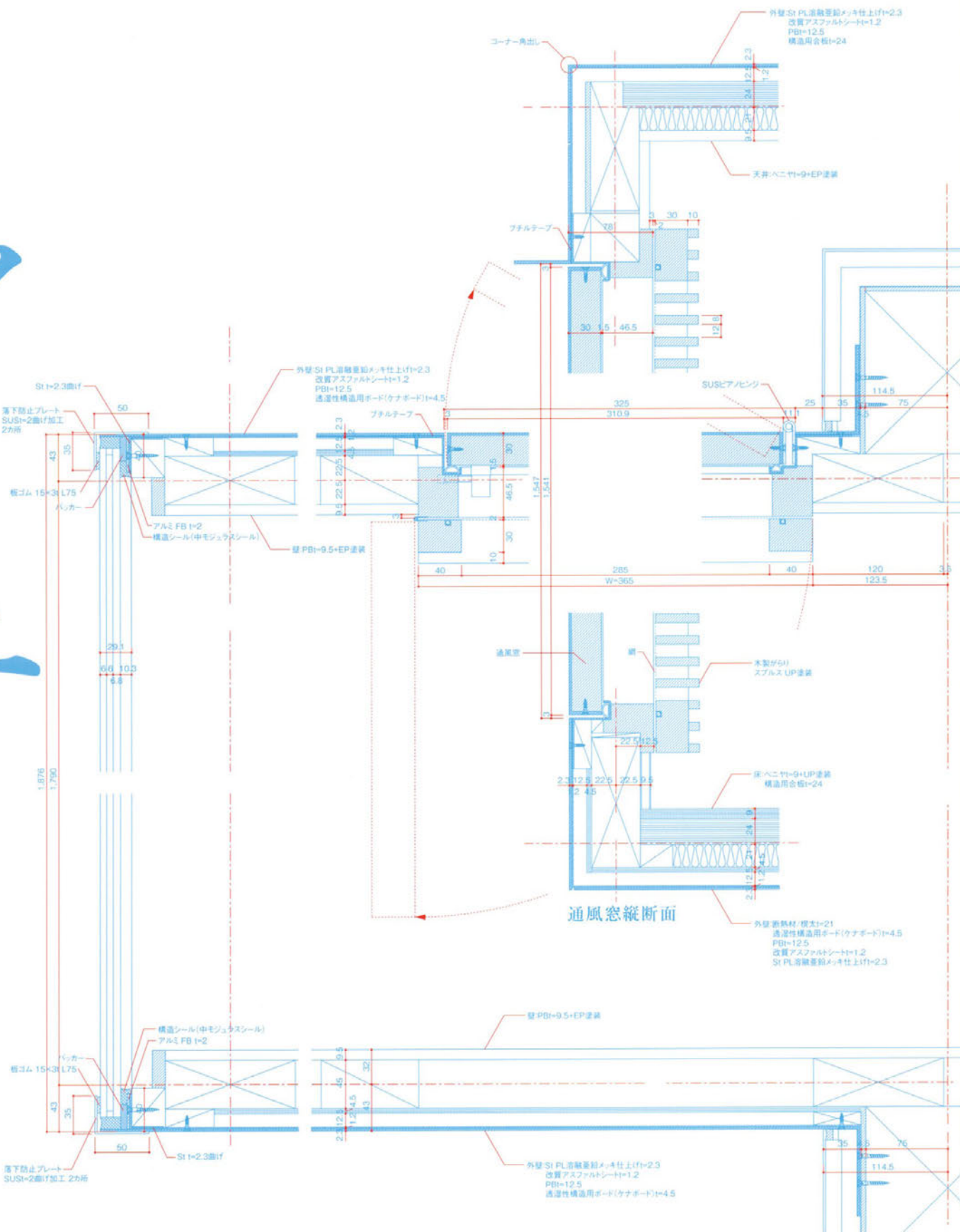
DETAILを現代の英語の辞書で引くと、「建築の細部「装飾」と出る。モダンデザイン全盛の現代でも、辞書は脈々と続く建築の歴史の痕跡を伝えている。しかし、現代の建築家に質問しても、DETAILを、少なくとも「装飾」と即答する人は少ないだろう。とはいえ、「建築の細部」と答える人もまた少数派に属する時代に入ったような気がする。あらためて学ぶことができた。ディテールは単なる「細部」という概念を払拭しつつあるようだ。建築をイメージする総体を具現化する重要なファクターのひとつ。ディテールという言葉は、新しい意味を身にまといはじめているらしい。

特集

Special Feature / On Details

あ
ら
た
め
て

ファサード



通風窓縦断面



1/5

「八雲の家」の北側出窓詳細図
表紙写真および4~15ページ参照)

「八雲の家」のファサードを特徴付ける出窓は、1,870mm角で外壁から750mm飛び出し、内部から見たときには窓枠がわず 外観上は厚さ2.3mmのスチールプレートの枠だけでガラスを支えているようなシャブな表現となっている。スチールプレートは構造用ボードと重ねて柱梁にネジで固定。ガラスは構造シールを使って取り付けられ、ガラスシール スチールプレート枠が一体となって外力を負担している。出窓東面には、通風のために扉と木製ガラリを設けている。

座談会＋ケーススタディ

建物名

「八雲の家」「PATIO」

設計

矢板久明＋矢板直子



Yaita Naoko

矢板直子



Yaita Hisaaki

矢板久明



Niizeki Kenichiro

新関謙一郎

空間のとらえ方が人それぞれであるように、ディテールの考え方も建築家によってさまざまだろう。そこで、特集の巻頭として、緻密なディテールで定評のある矢板久明さんと矢板直子さんに、ディテールへのアプローチ手法を聞いてみた。聞き手は新関謙一郎さん。前号の特集で取材した住宅「NRS」だけでなく、どの仕事でも建築意図を際立たせるディテールが印象的な人。どうせなら、と、矢板さんたちとは考え方が異なりそうな建築家にあえてお願いした。新関さんには、矢板さんたちが設計した住宅「PATIO」を事前に見学したうえで、座談会を行う「八雲の家」に来てもらった。結果を言ってしまうと、話は、お互いの建築のあり方を探る方向へ進んでいった。言い換えると、ディテールのために、番大事なのは、ディテール以前にあるのかもしれない。

まとめ／加藤純 写真(八雲の家＋ポートレート)／藤塚光政 写真(PATIO)／小川重雄

「八雲の家」の北側外観。
傾斜地のレベル差を生かした地下1階(RC造)、
地上2階(木造)の建物。
出窓は通りへ内部の気配を感じさせ、街との
コミュニケーションを図るメッセージという
考え方でデザインされている。

矢板久明さんと 矢板直子さんに 新関謙一郎さんが聞く、 建築とディテール

「おまえは柱か、おまえは壁か」

——建築にとってディテールが関係するのは、見え方や機能、材質などの要素であると思います。今日はそうした観点を含めて、みなさんにお話ししたいのですが、最初に新聞さんから、矢板さんたちの設計された住宅を2軒ご覧になった感想を聞かせてください。

新聞 記者 先日うかがった住宅「PARTIO」(2011)で、矢板さんの設計を初めて目の当たりにし、自分の仕事の仕方問われるほどの強烈な体験をしました。建物のきれいな部分写真を見ても、なぜそうあるべきかがよくわからないことがあります。実物を体感すると3次元でとらえることができ、なぜそのディテールが求められているのかがわかってくるので、見る意味は大きかったです。今日の「八雲の家」(11)は2軒目ですから、このあたりよりも少し落ち着いて見ることができたいと思います(笑)。ただ、どちらの家でもディテールというよりは、まず建築のあり方や建ち方について意識が向きました。「矢板さんたちの建築はディテールがなくても成り立つのだろうか、ないと成り立たないのか、またはギリギリ成り立つところはどこだろうか」ということを気にしながら見ていました。その境界というか輪郭を、今日の話から知ることができればと思っています。

要望や必要があつて、ディテールは出現する

矢板久明(以下、久明) 私たちはふたりとも、比較的大きなスケールの建物から設計のキャリアを始めています。そういった建物では、骨格を決める考え方や空間や光の印象的なシーンなど、設計者として強くイメージすることが必要ですが、住宅では特別に「こうしたい」という意識はもたずに臨んでいます。

矢板直子(以下、直子) 建て主が求めていることや必要な機能をまず知ることが大切なので、私たちがどのようにつくりたいかは関係ないのです。家の形は軒 軒変わりますし、ディテールも変わってくる。同じような納まりとなることもありますが、建て主の使い勝手や要望に応じて細部は変わります。

久明 オーダーメイドの洋服をつくっている気分ですね。建て主の雰囲気や趣味に合うのはなんだろうと考えていくと、建て主と共有するテーマや目標が出てきて、議論しながらつくっていく。要望が難しいければ難しいほどそれがエネルギーになりますし、相手の力を借りて思考を進めていくので、着地点が楽しみにあります。建築家は建て主の希望を実現する、いわば触媒のような役割だとも思っています。

新聞 最初は白紙から始まり、1本の線が出てきて何かが入ります。こうしたきっかけは、建て主の要望や趣味なのでしょうか。

直子 暮らし方全般ですね。居心地がよいという感覚は人によってすごく違い

矢板久明

Yaita Hisaaki

やいた ひさあき
1955年生まれ。79年明治大学理工学部建築学卒業。82年東京大学大学院修士課程修了。82、93年谷口建築設計研究所91年矢板久明建築設計研究所設立。95、99年工学院大学非常勤講師。2004年より矢板直子と共同主宰。05年矢板建築設計研究所に改組。

矢板直子

Yaita Naoko

やいた なおこ
1958年生まれ。82年日本女子大学家政学部住居学科卒業。82、2002年アーキブレイン建築研究所。02年内田直子建築研究所設立。05年より矢板建築設計研究所共同主宰。

おもな作品と受賞 『ASA TRIADE』(96)で住宅金融公庫賞、ケアハウス、リハビリターゲーション(99)で彩の国さいたま景観賞、越谷市建築景観賞(磯子台の家)(00)、『OPERA』(02)、『IL TEMPO』(03)、『ふじみ野の家』(06)、『紫水苑』(07)。

ます。寸法でも、身体感覚によって広さに対する感覚は違います。それで、最初のうちはずっとヒアリングします。私たちが「プログラムシート」と呼ぶ表に、建て主の要望を細かく書き出していきます。ヒアリングを重ねることに部屋同士の関係性も考えてバージョンアップさせ、予算の概算も出しますが、具体的な形をつくることはこの段階ではあまりしません。

久明 ディテールはあくまで、要望や必要があつて出てくるものです。たとえはこの「八雲の家」では、階段の踊り場付近で求められる用途や安全性を入れ込みながら出窓部分の縦格子や手すりの形が出てきましたが、リビングの中の重要なデザインエレメントにもなりました。

新聞 それはいつ頃の段階ですか。

久明 現場に入ってから、それも後半です。ディテールとして検討するのはおもに現場に入ってからで、それぞれの部品を発注する寸前まで描いて検討しています。そこまで進まない、なかなか手で触れたときのイメージまでできるようにはならないものですから。

直子 足したり引いたりといった検討をずっと続けています。自分たちでは「最後の塩・胡椒」と言っているのですが、ギリギリまでがくというか、最後にある美学が見つかればよいという感じでしょうか。

見た目の美学と機能の両立

新聞 最後の塩・胡椒の手順がないと、どうなると思いますか。

久明 大事なものが足りないと感じるでしょうね。この住宅での別の例では、キッチンの換気扇を横引き排気の製品にしていますが、これは現場に入ってから、建て主の要望で天井付けタイプから変更したものです。キッチンカウンタ1の上に、設備機器としてはなくオブジェを置くような見せ方でディテールを考えていきました。現場での変更とはなりませんが、使い方の要望も加わることで、生きたディテールになったように思います。「見てよし、使つてよし」と言いますか、見た目の美学と機能を両立することを考えていくのです。デザイン上で必要だからといってできたものではありません。

新聞 私も、建物をつくっていく過程で気づくことや思うところはいろいろあります。現場の変更で気になるのはまず金額や工期の面ですが、建て主に金額が変わることの説明ややりとりはどのようにするのですか。変更する部分の工事はストップして、金額の見積もりをし、それを建て主が了承してから再び工事をするという手順をとるのでしょうか。

直子 そうですね。ストップはしませんが、できるだけオープンにして説明するようにしています。

久明 設計者が建物についてまず決めるのはスペックで、そこから金額を出して発注しますので、まずはその枠のなかで考えることとなります。ただ、住宅の場合はビルと違ってスペックをもとにした施工図がなかなか用意されませんから、自分たちでまかなわないといけない。いきおい現場に入ってから施工図に近い図を自分たちで描き出すこととなります。けれども手元に引き寄せて考えることになるので、論理的な思考というよりも感性的な思考が働くことが多くなり、そのほうがはるかにおもしろい。方で全体の 貫性は薄くなりがちで、どのようにそれぞれを統合して、統一した美学を出すかについては頭を悩ませるところです。

新関 そこはどうしているのですか。最初の方針が通っていて、建築としての総体がしっくりしているの、後からまとめられるということでしょうか。

久明 そうだと思いますが、実務を始めた頃は、設計や施工の途中で新たな要望が出されることは恐怖でした。自分のストーリーが崩されるのではないかと思っていましたから。今は経験を積んだこともあって、必ず答えは見つかるという確信がありますし、逆に自分の気づかなかったことを知らせてくれるチャンスのようにも思っています。

建築としての性能をどう整えるか

新関 「八雲の家」でのスチール枠をまわした開口部の出し方などは、建て主からの要望はとくになかったと思うのですが、どこから出てきたのですか。

久明 出窓の飛び出した枠は、ここに通風用の小窓を付ける目的と、リビングのソファから外を眺め、奥行き感と開放感をもたせるといった室内側からの要請や機能をそのまま外に出しました。少しとぼけたような表現です。以前は外観を守る気持ちが強く、美学的整合性を意識しすぎてなかなかできなかったのですが、こうしたことをやる勇気が最近では出てきたように思います。ガラスは、出窓全体をソリッドな塊として表現するために、透明な石のように扱い、枠を見せずに構造シールを用いて貼り付けてあります。アルミのフラットバーを裏に使うことも大切で、シールの専門家に強度計算をしてもらったうえで採用しています(3ページ北側出窓詳細図参照)、これは「PATIO」にも共通



「八雲の家」にて。
右から矢板久明さん、矢板直子さん、
新関謙一郎さん。

新関謙一郎

Niizeki Kenichiro

にいぜき けんいちろう
1969年東京都生まれ
93年明治大学理工学部建築学科卒業。95年同大学大学院修士課程修了。96年きき設立。2002年NIIZEKI STUDIOに改組。07年「八雲の家」(02)でAgnelli Prize受賞。そのほかのおもな作品「WEP 下北沢」(06)、「NRS」(08)、「NGT」(09)、「ZMZ」(10)、「HTG」(10)。*「TO通信」2012年新春号での「NRS」の取材記事は、ウェブサイトででもご覧いただけます。
www.toto.co.jp

建築としての性能を
どう整えるかは
大きなテーマで、
ディテールにかかわってくる
重要な要素です。
—— 矢板久明

するディテールです。北側のファサードは、斜線制限から出てきた斜めの形を生かしたもので、内部を反映したため対称形ではありません。この形状は早い段階で出てきました。また、2階リビング・ダイニング・キッチン・頂部のトップライトは、暑くならないよう最小限の幅で設けました。そしてスリット上部に少し大きな空気だまりを設けてあります。トップライトからの光でここが当たられ、立ち上がりにつくった風抜きの換気窓を開けると、ドラフトが生じ、風が上へ流れていきます。建築としての性能をどう整えるかは自分たちの大きなテーマのひとつで、ディテールにかかわってくる重要な要素です。

新関 形状や大きさは最初に出てきて、そこにいろんな要請が入ってくることは想定しながら、それらはほぼ受け入れられるだろう、と考えているということですね。

直子 プログラムシートを作成する過程で、部屋に必要な要素や部屋同士の関係性は議論しつくされています。そしてかなりの数の案をつくるのですが、この「八雲の家」でも50案は出しています。

久明 私が修業させていただいた谷口建築設計研究所では、とにかく案をたくさんつくって検討することを教わりました。そのなかで、「汗をかく」方法とこのことの大切さを知りました。エレベーションの検討といえは、「まず100枚」と言われましたから。それは淡々と検討を進めていくうちに見えてくるものがあるということ、多くの場合、後から論理的な筋が浮かんできます。私たちもそのようなアプローチをとっており、こうした姿勢は谷口吉生さんから教わったように思います。

ディテールとコストと時間

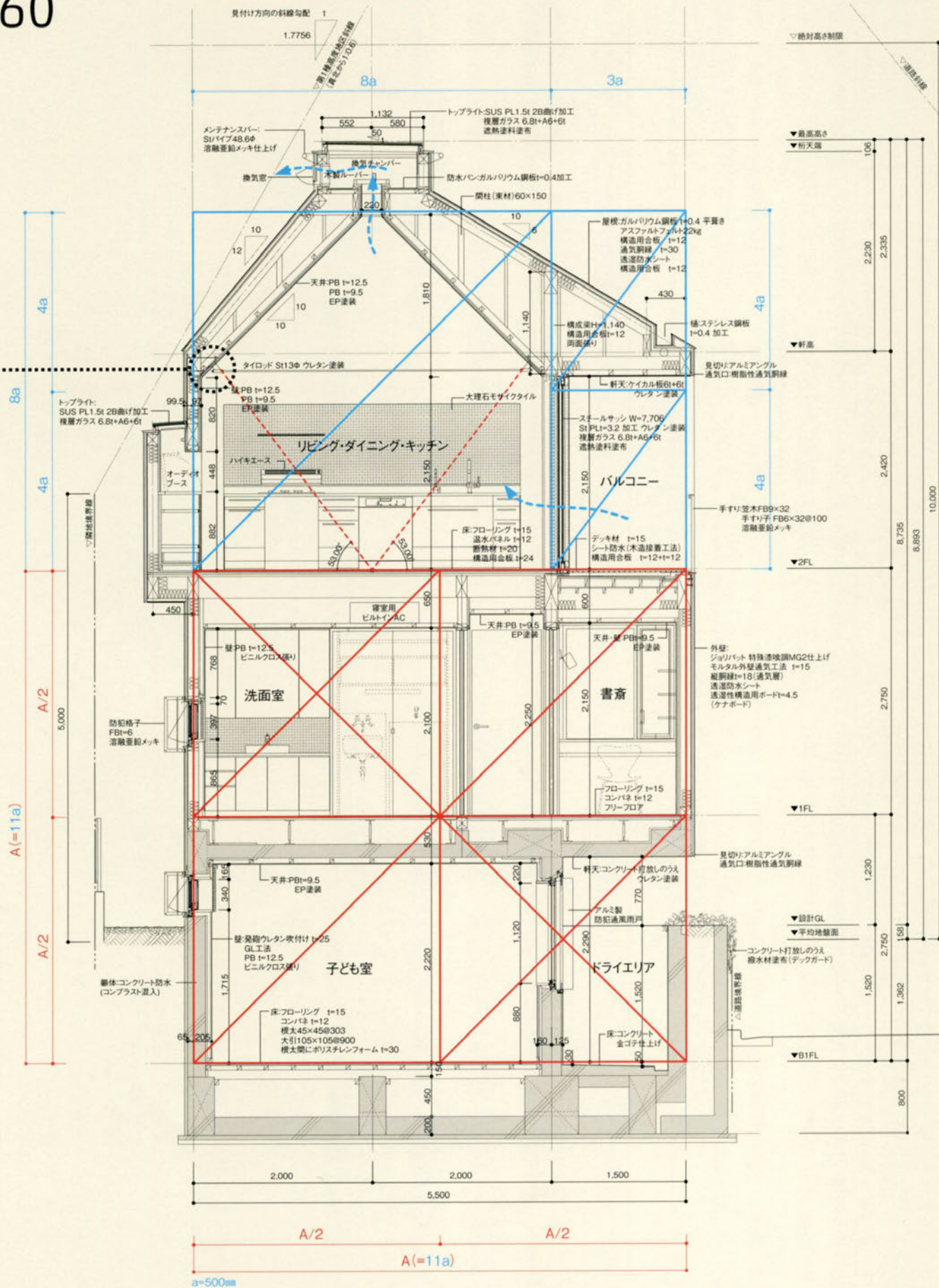
新関 汗をかくということでは、ディテールについてはどうですか。やはり数多く検討されるのでしょうか。

久明 ディテールの場合には数多くというよりも、考え方を見つけることを重視します。ディテールの考え方には2種類あると思います。最初からディテールにアプローチする方法と、後からアプローチする方法です。前者は、骨格を成り立たせるものや建設プロセスから、またコスト面からアプローチします。後者は、使いやすさや触ってどうかということからアプローチします。言い換えれば、どのレベルの視点から見ているかということです。鳥瞰的な視点と、

「八雲の家」の断面図

0 0.5 1m

1/60

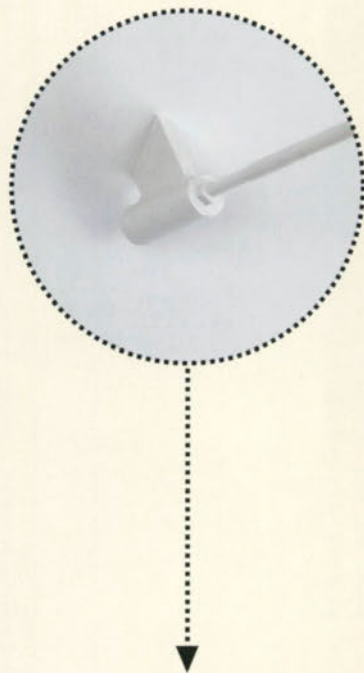




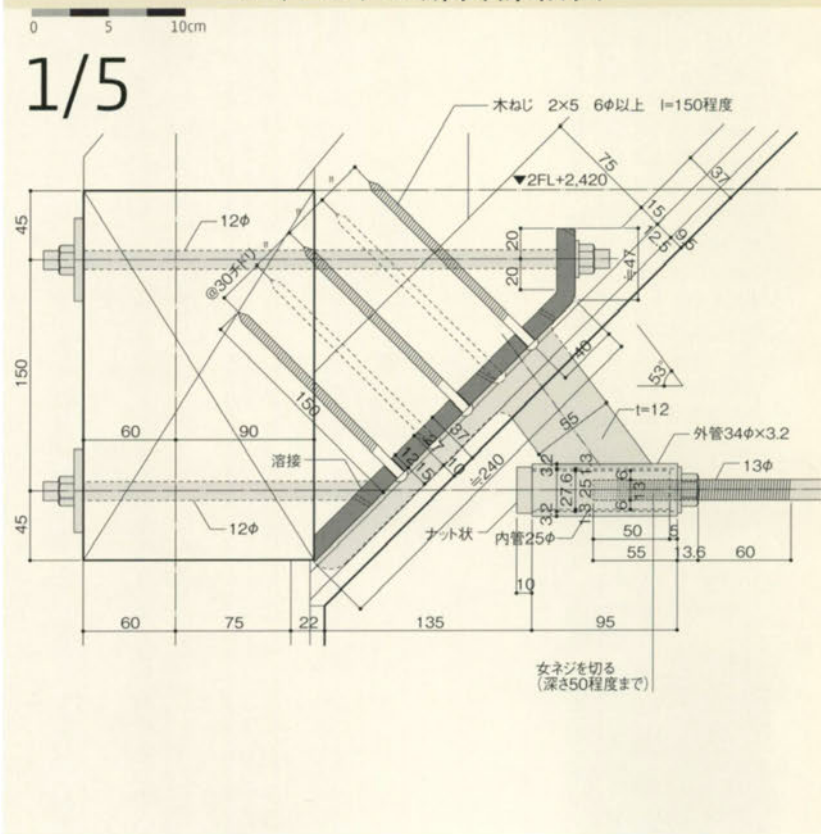
写真右/北西側全景。中/西側外観。北側の出っ張った表現とは異なり、壁が穿たれたようにバルコニーが設けられている。左/アプローチ階段と本体は緑が切られている。

タイロッドは空中に浮かぶように

桁同士をつなぐ4本のタイロッド(13φ)は、天井面からプレートを出す形状にすることにより、棒が空中に浮かぶような見えがかりとして、軽快さを表現している。なお、タイロッドのプレートの角度は、右の断面図でわかるように、左右ふたつの延長線がちょうど床面で交わるようになっていて、細部にわたりプロポーションが考えられている(断面図の赤と青の線は、プロポーションを示し、解説は12ページ参照)。



タイロッドの断面詳細図



皮膚感覚の視点というのですが、対象を見る距離が変わるということで、私たちはその両方を行ったり来たりして進めていきます。

新関 やはり、コストコントロールがすごく大変そうですね。

久明 ただ、建物の大きさとコストを出すのに時間をかけていますから、大きくはずすことはありません。面積やボリュームを出して仕様を決め、地下は1・4倍、吹抜けは0・5倍など、それぞれに対応する独自の面積指標と坪単価をかけて算出しています。

直子 プランを描かなくても、数字で丁寧に分析していけば、それらの数字が言葉のように語りだします。

久明 全体予算のコスト管理、要望の整理、プログラムと面積をどう描くかが私たちの仕事。そこまでで8割方は終わりで、ここが見えてくると後はだいたいのつてきます。

新関 コストと同時に、時間もかかりますよね。形を変えるとすると、再度発

注して手間と時間がかかってきます。施工業者は対応できるのでしょうか。

久明 もちろん、施工会社の経験や態勢、能力によります。大きな建物を手がける大手ゼネコンではサイドステップを踏みながら変更に応じていくことができますが、住宅規模では時間が延びるリスクが大きい。本当は事前に決めておきたいことですけどね。

直子 時間の制限がとりわけ厳しい場合は、工期を短縮するために工法から考えています。

久明 工法を工夫し、設計から竣工までが7カ月というごく短い期間の案件もあります「打越の家」(05)。

見えない関係が建築全体を決めていく

新関 検討の余地や余裕は計画に織り込んでいるのですか。というのも、その設定が最終の出来上がりにも影響してくるはずだからです。要望をなんでも受け入れて進め、原寸で体験して新たに追加や変更をしていくとなると、もともとの骨格をどのように考えていらっしやるかが気になります。



▲ 出窓側面の通風扉



▲ 出窓の通風ルーバー



▲ 出窓内部

写真上/出窓のガラスはフィックスだが、東の側面に通風用の開口部が設けられている。庇の付いた部分はその扉。中上/通風窓の内側は、網が張られた木製ルーバーとなっている。中下/出窓には、季節ごとにクリスマスツリーやお雛さまなどが飾られ、住まいの中でも特別な場所として楽しまれているという。下/キッチンの換気扇は、横引き排気の製品がカウンターの上にオブジェのように置かれ、その上部には整流板として、6mm厚の強化ガラスが壁に差し込んだような表現で取り付けられている。

▼ キッチン



久明 骨格としては空間の質をどう確保するかが重要で、それには空間の大きさやボリュームが深くかかっていると思います。たとえばリビングの標準の広さは、ソファを置いた暮らしでは理想は16畳。自分が育った環境から出てきている広さなのですが、そこからスタートして全体とのバランスで決めていきます。そして、空間の骨格をつくる最後の段階として、プロポジションが大切です。この「八雲の家」では、1階の平面は正方形がふたつ入る5・5m×11mの寸法をしていて、リビングの断面は正方形がひとつ入るようになっていきます。プランニングが定まってきた段階でプロポジションを整えてボリュームを決めるこの手順は、私たちは重要なステージとしてとらえています。「PATIO」では、2対3のプロポジションの長方形が採用されています。

新関 現地でこのプロポジションの図を見たときには、驚きました。

久明 あくまでボリュームとして空間をとらえていますので、高さ方向も整えていきます。「PATIO」に入ると、空間が見えないところまで連続した泡のようなものとして感じられ、包まれたような落ち着いた感じを受けます。「八雲の家」でも、リビングに現れているタイロッドと天井との角度は、延長線がちょうど床面で交わるようになっていきます。見えない関係が建築全体を決めていくのは、私が「オーダー」と呼ぶところで、空間や物の秩序ある関係を意味し、プロポジションもそのひとつです。私は修士論文で、ルイス・カーン(Louis Kahn/1901-74)の比例概念の研究をしました。彼のすべての建物のプランが正方形や黄金比のひとつである5対3の矩形をもとにしていることがわかりました。これは古典的伝統を踏まえながら、建築を革新したコルビュジエ(Le Corbusier/1887-1965)や、ほかの建築家も用いる設計手法で、全体を整える際の重要な要素になっています。



空間の骨格をつくる最後の段階として、プロポジションが大切です。

—— 矢板久明

直子 落ち着き、疲れない空間づくりには、バランスが重要です。最後に調整をしていく手順をとることが、その役に立つということです。

新関 整えられるとどうなるのでしょうか。

久明 「建築」になっていく、ということですね。部屋と部屋の大きさや関係性に、秩序を与えているのだと思います。最後に出来上がったところで安定し、包まれたような居心地のよいスペースになると感じます。

新関 矢板さんたちは建物に、安定感や調和をもたせることを目指していらっしゃるのでしょうか。

久明 そうですね、私たちのつくる建築は古典的なかもしれませんが、それはオーダーが形づくると安定感であり、秩序ある美学を私たちが希求している結果ともいえます。コルビュジエも建築とは何かと問われたインタビューに「考えるに値するものに秩序を与えることだ」と答えていたことをいつも思い出します。プランができたときに、ひとりでに正方形や5対3などのプロポジションが現れていることに気づくことも多くあります。そのプロポジションを混在させずに貫き、貫き、貫き、建物自身のキャラクターや個性となっていくことです。私たちがほかの要件もすべてをひとつの器に入れて、カタカタと揺らしながら調整をしていくうちに、だんだんと概念が現実化し、ディテールを思考することを通して着地させることができるようになります。概念を現実化させるのに必要なのがディテールだとすれば、プロポジションを整えることも同じような位置付けだと考えています。

「ぞんざいな感じ」をめぐって

新関 建築にさまざまな要素が積み重なっているとき、使い勝手のために並ん

出来上がりきれいに
見せようというのではなく、
成り立ちを見せて
後からでも
プロセスがわかるように。

—— 矢板直子



写真上／2階のリビング・ダイニング・キッチンを見通す。天井頂部に幅220mmのトップライト。左手取納奥にもトップライトがある。キッチンには壁を彫り込んで、かまどのように設けられている。計画全体を通して、壁に対する関係が慎重にスタディされている。右中／上の写真の見返し。桁同士をつなぐ4本のタイロッド（9ページ詳細図参照）。右下／階段越しに出窓を見る。左下／玄関や窓まわりは、2.3mm厚のスチールプレート溶融亜鉛メッキ仕上げ。



▲ リビング・ダイニング・キッチンを見通す

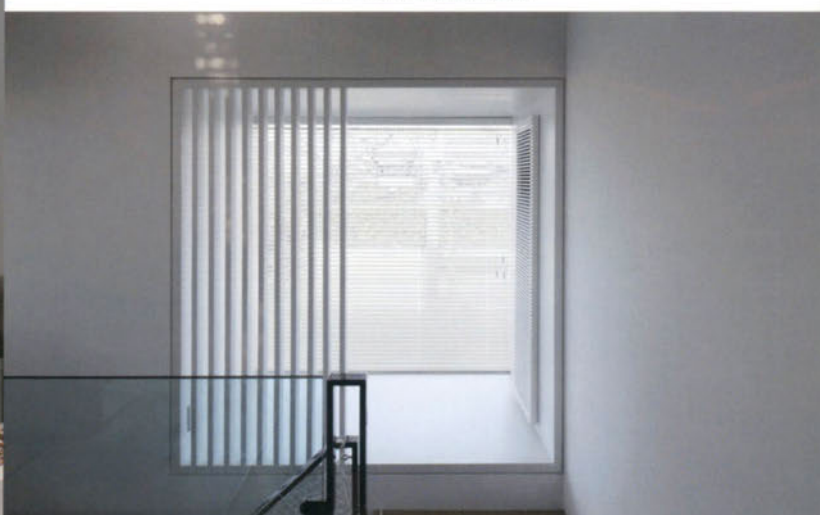
▼ 玄関と出窓

「八雲の家」



▲ リビング・ダイニング・キッチンを見通す

▼ 室内から出窓を見る



でいるだけでは完全な秩序になりきれないのでしょね。オーダーやプロポーションで概念的にまとめていく。この手法を矢板さんたちがどのタイミングでどう使うかが、話を聞く前はわかりませんでした。

久明 先ほどお話ししたように、基本設計の後半ですね。はじめから意識している、思考が縛られてしまうので。

直子 私たちは「解ける」という言葉をよく使います。オーダーが建物に重なってさまざまなことが解決したときに、オセロの面が揃うように感じます。構造上の通り芯のとり方も建物によって変わってきます。「八雲の家」は木造なので柱芯でとっていますが、「PATIO」では内法で押さえています。

新関 これにもビックリしましたね。

久明 そうして空間が立ち上がってくると、そこに意思が宿ったように感じられ、空間にぞんざいな感じがなくなってきました。

新関 「ぞんざいな感じ」というのはどういうことですか。

久明 端的にいえば、設計で考えるのを忘れたところですね。たとえば、たくさん

さんの部品が意図どおりに、直線に並んでいるだけで、それらの部品が喜んでるように見えますが、そうでない場合はぞんざいに見えてしまいます。設計で検討しつくされていないと出来上がったときにどうなるかわかりません。

新関 耳が痛い話ですね……。

久明 すべてが行き届いている感じ、というのでしょうか。建物を構成する

つひとつを見るとき、「こう考える」ということが手紙に書かれたメッセージのように伝わってくるのが重要だと思います。たとえばミス・ファン・デル・ローエ (Ludwig Mies van der Rohe / 1886~1969) の設計した「フアンズワース邸」(1950)では、既製のスチールアングルを使ってきれいな窓がつけられています。プランからディテールまで意図が一貫して表現され



写真上／玄関の靴収納。収納に関しては、これ以外にも子どものおもちゃや絵本、オーディオ機器、レコードやCDなど、目的別に細かくデザインされている。中／玄関の収納扉は枠を設けずに、パーティの板が壁一面に張られたような表現となっている。下／1階のトイレ。

プロポーションを当てはめると建物がフワッと自由になることが多い

矢板さんたちは、概念を現実化し、着地させるために必要なものとして、ディテールとプロポーションを挙げる。プランニングが定まってきた段階で、プロポーションを整えてボリュームを決めるという。プロポーションで縮めるというイメージがわくが、逆に、プロポーションを当てはめると空間は膨らみを得て、建物がフワッと自由になることが多いと矢板久明さんは語る。「八雲の家」では、左の平面図と8ページの断面図でわかるように、平面・断面ともに、正方形のプロポーション。赤で表示された大きな正方形(キューブ)の中に、青で描かれた小さな正方形(キューブ)が入ったような関係となっている(a=500mm)。

1階玄関から階段を見る。壁がくり抜かれたような表現で、ここでも壁が意識されている。



ていて、どこを切ってもフアンズワース邸とわかる。そこには思想があるし、驚くほど丁寧です。

新関 どこを切っても類似するという姿勢は矢板さんたちのディテールそのもので、その姿勢を建物に込める感じが伝わってきます。プロポーションを当てはめて最後に締めていくことを聞くと、自分は逆だなと思いました。もしプロポーションのことを考えていても、進んでいくうちにあまりまとまっていなくていいのではないかと思いい、最後はずらしてゆるめていきますから。

久明 私はむしろその反対で、プロポーションを当てはめると空間は膨らみを得て、建物がフワッと自由になることが多いように感じています。

新関 そうですか。ただ、その感覚はわかるような気がします。建物が違う次元に昇華するような感じなのでしょうね。また、「ぞんざいな感じ」という言葉が出てきたとき、自分は「ぞんざいな建築」を目指しているところがあるなと思いました。ディテールという袋小路のなかに入っていくと、土を掘ってジャガイモが出てくるときに、形は違っていても食べれば同じ、というようでありたいと思います。できるだけさまざまなことを受け入れられる建築にしたいと考え、ディテールでもそれを支えるあり方を検討するようにしています。つくるときに職人が思いつきで手を動かしても、それを受け入れられる人格を建物にもたせたいと考えています。

建築のなかの「おまえ」

新関 矢板さんはディテールを考えるにあたって、「おまえは柱か、おまえは壁か」と問いかけていくようなアプローチをしていくと聞きました。これは壁や柱をどのように見せるかで印象が変わってくるということですか。

建築概要

所在地	東京都目黒区
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども2人
設計	矢板久明+矢板直子/ 矢板建築設計研究所
構造設計	杉浦克治/構造設計社
設備設計	鳥津充宏/鳥津設計
コーディネーター	ザ・ハウス
施工	日祥工業
構造	木造、一部鉄筋コンクリート造
階数	地下1階、地上2階
敷地面積	106.32㎡
建築面積	63.61㎡
延床面積	164.55㎡
設計期間	2009年1月~2010年3月
施工期間	2010年7月~2011年7月

おもな外部仕上げ

屋根	ガルバリウム鋼板 t=0.4mm平葺き
外壁	透湿性構造用ボードのうえ モルタル外壁通気工法、 ジョリパッド特殊漆喰調 MG2 仕上げ 防汚塗料塗布
開口部	特注スチールサッシ、 一部アルミサッシ
出窓部	透湿性構造用ボードのうえ PBt=12.5mm StPLt=2.3mm 溶融亜鉛メッキ仕上げ
外構アプローチ	コンクリート金ゴテ仕上げ
外構壁	コンクリート打放し 撥水材塗布

おもな内部仕上げ

リビング・ダイニング・キッチン	
床	スギフローリングt=15mm オスモワンコートオンリー拭き取り
壁	PBt=12.5mm+9.5mm AEP、 大理石モザイクタイル張り (キッチン前面)
天井	PBt=12.5mm+9.5mm AEP
玄関	
床	コンクリート金ゴテ仕上げ 樹脂ワックス塗り
壁	PBt=12.5mm AEP
天井	PBt=9.5mm AEP

寝室

床	スギフローリングt=15mm オスモワンコートオンリー拭き取り
壁	PBt=12.5mm AEP
天井	PBt=9.5mm AEP

浴室(ハーフユニットバス)

壁	モルタル下地のうえタイル張り
天井	珪酸カルシウム板t=6mm 2枚張りUP

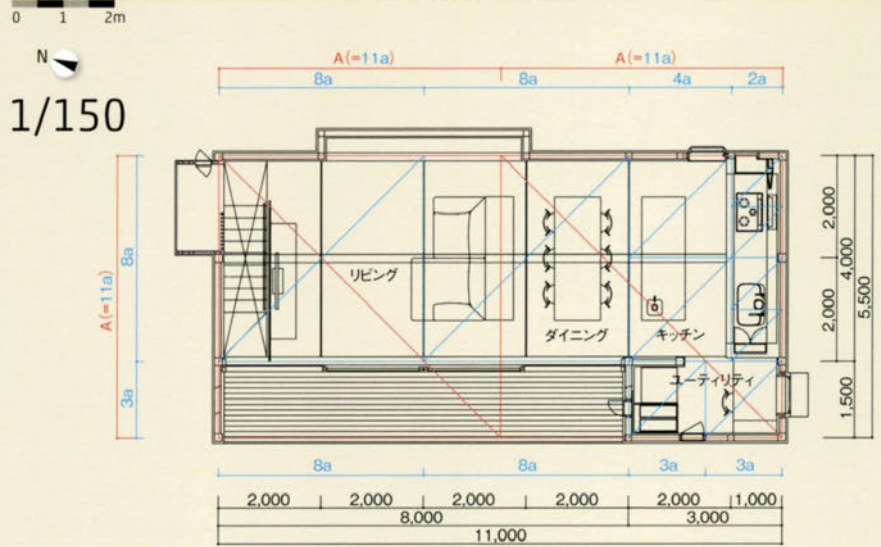
洗面室・トイレ

床	コンパネt=12mmビニルシート張り
壁	PBt=12.5mmビニルクロス張り
天井	PBt=9.5mmビニルクロス張り

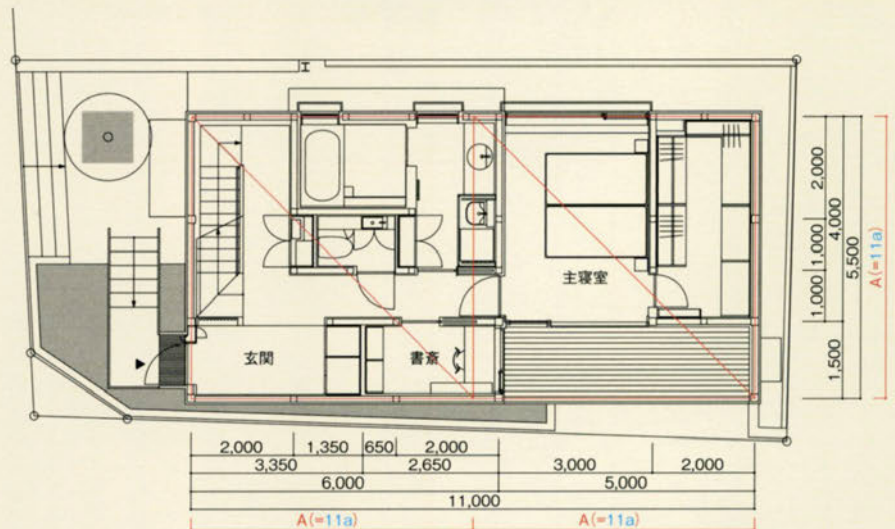
「八雲の家」

House in Yakumo

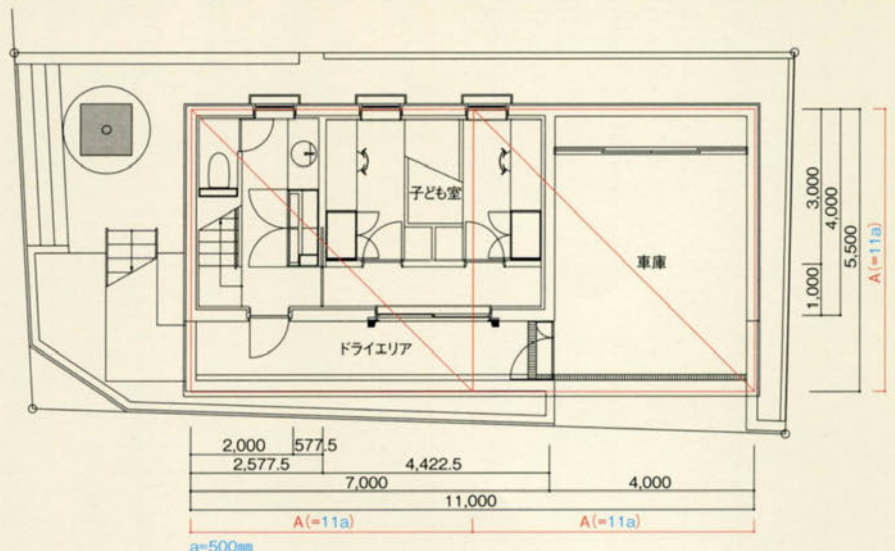
2階平面図



1階平面図



地階平面図



久明 そうです。「おまえは誰だ」と問いかけると、それが壁として意識されるようであれば、どんな工法に由来するか、どのような成り立ちをしているからなのかと考えます。たとえばこの「八雲の家」の玄関に設けた収納では、枠を出さないことでパーチの板が取り付く壁として意識されます。階段は、壁がくり抜かれたようなソリッドな表現にしています。キッチンでも枠を壁の中に入れ込むことで、壁に孔があいたような意匠になっています。これは、全体を塗り込められた壁として扱ふべき、と気づいたときから始まっています。

新関 矢板さんたちの設計した建築では、すごくたくさんの「おまえ」がいて、それぞれに意思が込められているように感じました。階段と踊り場の隙間に「おまえ」が見えてくると、新しいディテールがそこに必要になります。でも、全体を意識するなかで考えられていくので、じつは合唱のようにまとまっていると思います。建物を見つろいで、新しい「おまえ」がもういないとわかった時点で終わりなのだろうと感じました。

久明 そう思いますね。できれば「おまえは誰か」の確認は早く終わるといいのですが。そこからも一度設計の初期段階に戻ることができれば、高い次元の建物になるでしょうね。

新関 同じ人間が設計していれば、たぶん同じことでしょう。たくさんの「おまえ」に同じ服を着せるか、チーム名をつけるか。それぞれは違うことを話していても、同じように見えると思います。自分の建築では、「おまえ」がいるとしたら、それはひとりなのだと感じています。そのひとりをつくるために建築をつくる。「ここにもいた」という感覚はわかりますが、自分には大変すぎるでしょうから。図面の線も、本に重ねていきたい。線を消したいという意味ではありません。さまざまな理由で線が並列になっていくのがイヤで、ひとつでたくさんのことを解決するような線を引きたいと考えています。

論理的か、数寄屋のか

新関 先日「PARTIO」を拝見したとき、布をまとったようなあり方を求めた、という説明を受けました。そのとおりやわらかさを感じた。方で、柱や梁は衣を受けるために必要かもしれないけれど、ないほうが衣の感じが出たのかもしれないとも感じました。壁に現れているプレスについても、最初はど



矢板さんたちの建築では、階段と踊り場の隙間にと、「おまえ」が見えてくると、新しいディテールがそこに必要になる。

—— 新関謙一郎

して現したのかがわかりませんでした。

直子 つくり方を表に現して見せると、なぜ? とよく聞かれます。

久明 ありようをそのまま見せようということです。

直子 この外観は、外から覗かれないようにという施主の要望からきたもので、不思議でおもしろく見えることを狙ったのではありません。それをできるだけ素直な工法を用いて実現したということです。張りぼてにならないよう、成り立ちを見せ、後からでもプロセスがわかるようにつくりました。

久明 「コンストラクション」という言葉を意識するのですね。建物があるとき、その裏にあるのは「どうやってつくられたの?」ということで、そこは強く意識します。私たちが考えるオーダーも、そもそもは建設の過程でどう建てるかということから生まれてきたものです。

新関 「PARTIO」ではキーストンプレートなどに斜材や柱の役割を担わせて、それらをなくすつくり方があったのかもしれない。ただ、鉄骨がもつあり方を強調して、そのなかでまわりの部材を見せながらそれぞれの役割を語らせているのは、矢板さんたちの知的な手法だと感じました。

久明 プレースをはずすのは可能でしょうが、構造を考えると面や芯からはずれて余分なコストがかかってきます。また部分的に開閉も考えていたので、外皮は構造から自由であることも必要でした。あたりまえにやっていたって、どこまでできるのかという範囲で止めています。

直子 構造も、RCスラブから鉄骨への流れは見えるようにしたいと考えていました。アクロバティックなことは目指していません。

新関 構造上の力の流れも興味深かった点です。地面に力が流れていくときに、階ごとに壁の位置を移動しながら伝えていくのを見るのは不思議な経験でした。構造の合理性を純粹に追求してはいないところに、矢板さんたちの意志を感じたのです。

久明 構造合理主義ではないし、まず空間構成ありきという意味で、どこか数寄屋的な考え方をしているのでしょうか。

新関 物と物の当て方を見て、そう思いました。

久明 ある建築家からは自分たちの作風について、「正対して見れば古典、斜めから見ると近代」と言われたことがあります。建物が対称形をしていても、空間は流れるように感じるとい意味です。この流動性も、感性を動員しながらつくりあげるとい意味で数寄屋的かもしれません。とくにディテールを考えているときは、まずは成り立ちなどを論理的に考えながら、方で、感性でデザインを進めます。そしてまた客観的思考に立ち返り、実用的で機能的なディテールを概念化して統合させていくこととなります。これは、私たちがずっともちつけているテーマです。



「PATIO」の2階外壁はキーストンプレート。一部が、通風のため電動で開閉する(写真5点=小川重雄)。

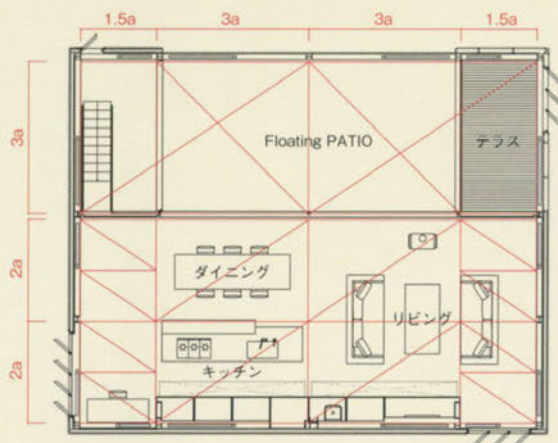
建築概要

所在地	東京都
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦
設計	矢板久明+矢板直子/ 矢板建築設計研究所
構造設計	杉浦克治/構造設計社
設備設計	島津充宏/島津設計
コーディネーター	ザ・ハウス
施工	日南鉄構
構造	鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
階数	地下1階 地上2階
敷地面積	172.19㎡
建築面積	79.41㎡
延床面積	226.86㎡
設計期間	2006年5月~2009年6月
施工期間	2009年7月~2011年11月

「PATIO」

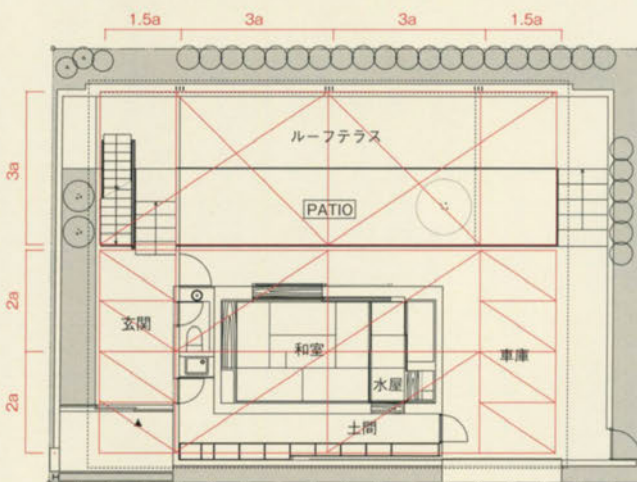
パティオ

2階平面図

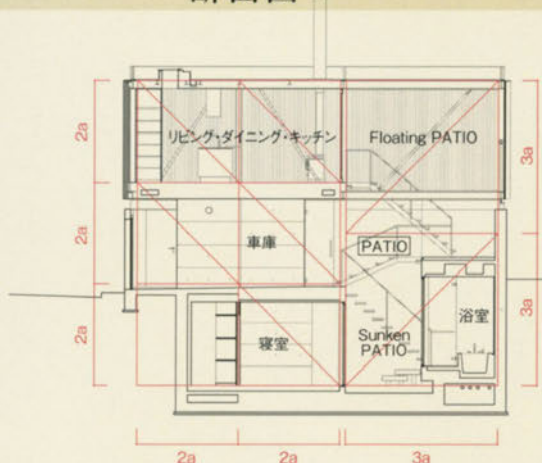


0 1 2m
N
1/200

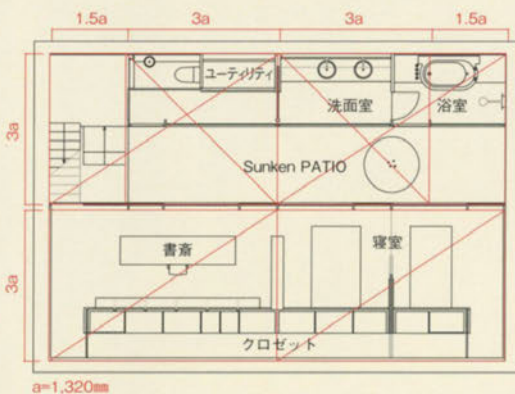
1階平面図



断面図



地階平面図



秩序ある関係を「PATIO」のプロポーションは2:3の長方形。通り芯のとり方は建物によって異なり、木造主体の「八雲の家」は柱芯、RCと鉄骨造の「PATIO」は内法で押さえてある。地階と1階がRC造、2階は鉄骨造。



東側外観



2階リビング・ダイニング・キッチン



西側から東側を見る



北側から南側を見る



で 場 を と ら え る

八島正年さんと八島夕子さんがつくる空間は、「光」が印象に残ることが多い。初期のスケッチから一貫して光と場の関係を探っているようにもみえる。今回訪れた「関前の家」は、住宅密集地に建つ都市住宅ということで、自然光のもつ意味はとくに大きかったのかもしれない。さまざまな光のディテールが、さまざまな場をつくり出していた。

全面畳敷きの2階の広間。形の異なるトブライトと高さ1,300mmの地窓に近い掃き出し窓で自然光を取り入れ、多様な場をつくり出す。撮影したのは1月だが、夏場は畳までトブライトの光の帯が届くという。正面奥は玄関土間の吹抜けで、一体の空間となっている。



特集／あらためてディテール ケーススタディ1

光のディテール

関前の家

設計／八島正年+八島夕子

都市に住宅を建てるには、日本特有の事情に配慮する必要がある。小さく変形した敷地、幅の狭い道路、建ぺい率・容積率、斜線制限などなど。それに対応すべく、クルマ界における軽自動車のように、都市住宅は独自の進化を続けてきた。例えば、雑誌『都市住宅』（鹿島出版会）の創刊が1968年。そこを舞台に活躍した「都市住宅派」の建築家たちによる試みをその嚆矢とするなら、40年あまりの歳月が流れたことになる。中庭、半地下、ロフトの活用、屋上庭園といった手法は繰り返し試みられ、いまやとくに意識されることがないほどに一般化した。

外壁を閉ざして、トップライトから採光する手法もそのひとつ。密集した周辺環境に対して、明るさとプライバシーを両立させる。今回訪れた「関前の家」でも、ごく自然に採用されている。しかし、そんな図式的な理解はあっさりとかつがえされた。配置計画からプランニング、開口を含めた断面計画、そしてディテールに至るまで、さまざまなスケールでの入念な設計により、洗練といったレベルをはるかに超え、光によって変容した空間を体感することになる。

家全体を感じる光

駅からの道中には武蔵野のおもかげが残るものの、比較的建て込んだ住宅地に敷地はあ

る。道路から15mほど奥まったところ、豊かな植栽の先に控えめなファサードが見える。旗竿状敷地の場合、建物の顔として、アプローチから見える面積を極力大きくするのが一般的だ。それがここでは、小波のガルバリウム鋼板という質素な素材による壁面がつましげに顔をのぞかせ、小窓と「妻入り」の玄関庇が見えるだけ。最大幅が2・7mもあるアプローチは明確に前庭として意識され、建



物に至るまでのストリーが展開していく。

引き戸の玄関を入ると、また小さな驚きが続いている。土間の先と正面廊下の先に、それぞれ開口からの光が漏れているのが目に入る。そして土間吹抜けの上部からはトップライトの光が下りてくる。つまり、平面方向・高さ方向の最大距離をすぐに把握でき、住宅のボリュームを感じることができなのだ。コンパクトな住宅でありながら、視線の抜けが

心地よく、ひとつ屋根の下に暮らしているという安心感を与えてくれる。

脇の小窓は、200mm×300mmで20mm厚のダルガラスが嵌め込まれている。本来は砕いて工芸に使用するものだという。壁見込みが白く仕上げているため、壁とゾロに赤い寒天状のものが納まっているようにも見える。そして土間全体に淡い赤のグラデーションを描き、あたたかな雰囲気をつくり出す。逆に、

帰宅する夕暮れ時には室内光に照らされ、道路からはこの家の存在を示す赤いしるしとなる。

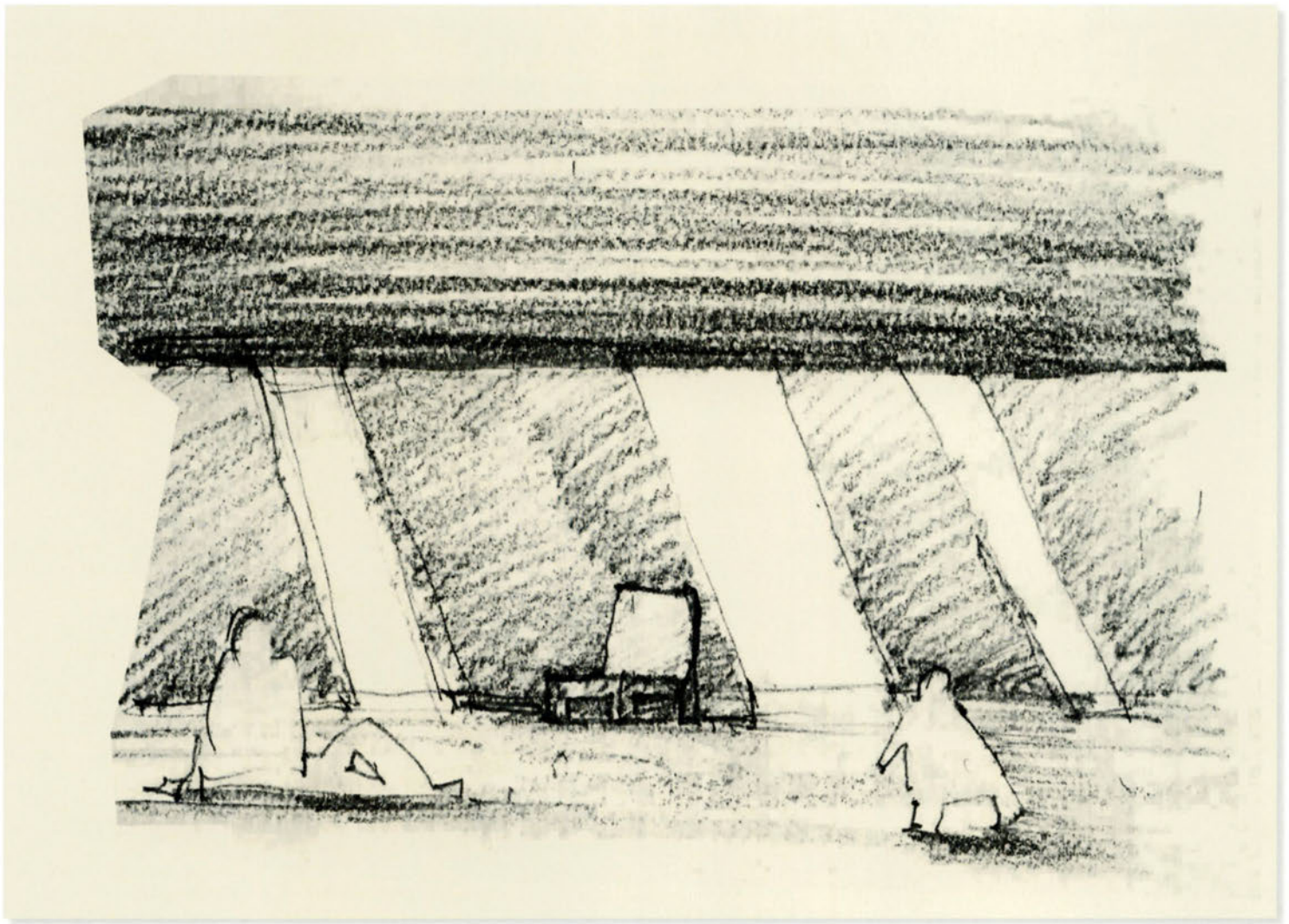
西側外観。旗竿状敷地のアプローチ部分から見ると、玄関扉が見えず、小窓だけが通りに向いている。庇のあるところが玄関。

吹抜けに導かれるように、階段を上がっていく。手すりは18mm厚のシナ・ランバーを2枚重ねし、半丸の棒をのせて仕上げた、薄くシンプルなもの。腰壁として上下階の雰囲気

気をやわらかくつなぐ。

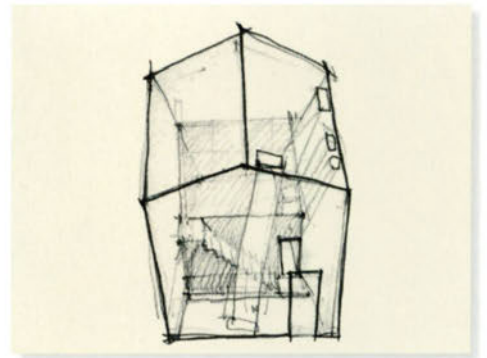
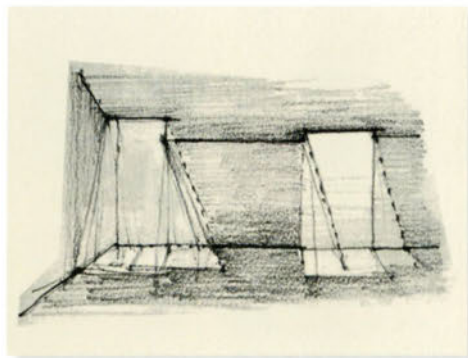
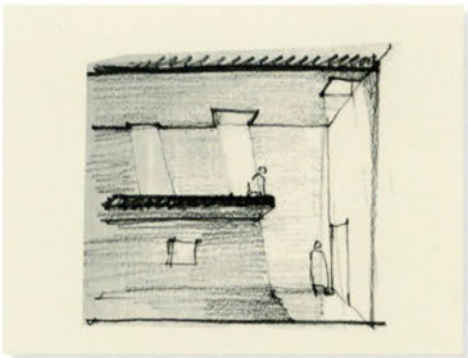
畳の床にためられた光

2階は縁なし畳を敷きつめた広間だ。デスクや収納を組み込んだ造り付け家具を介して、奥の台所までのワンルーム。建て主は以前の



初期スケッチ。トップ
ライトからの光のイメ
ージが、実際の空間に
生かされていることが
わかる（スケッチ提供
／八島建築設計事務所）。

きれいな光を見せたいというより
それがその空間の質を
どう変えるかに興味がある



写真上／吹抜けを介して広間と玄関土間がつながる。下／土間の奥から玄関を見る。土間は幅810mm、奥行き約5m。印象の強い赤い小窓はダルガラスが嵌められている。右手の飾り棚は、トップライトの影を消すために壁をふかしたことを利用して設けられた。



写真上／1階廊下から見た玄関。玄関扉は米松縁甲板張りの片引き戸。下／玄関土間吹抜け見上げ。薄い階段手すりは、18mm厚のシナ・ランバーを2枚重ねし、半丸の棒をのせて仕上げたもの。



写真上3点／広間東側の開口部は、外側からアルミサッシ、木格子（落下防止用で取り外し可能なネジ留め）、経木簾戸、障子という構成。季節や時間によって光量、風量、視線を調節できる。トップライトも合わせて、ひとつの空間がさまざまな表情を見せる。



Special Feature "On Details" Case Study Part 

光がどのような生活の場を生むか
生活をどう楽しいものに変えていくか

写真下右／小窓のダルガラスは厚さ20mm。中／1階個室は将来間仕切りできるように3つの出入口。左／玄関から1階廊下を見通す。



家でも床座の生活をされており、畳敷きの計画はすぐに決まったそうだ。清廉なたたずまいと適度な弾力をもつ感触。それは後述する光の効果とあいまって、格式張った和風ともカジュアルすぎるモダンリビングとも異なる、おおらかな広間の魅力に寄与している。ここでの自然光の扱いと、その形づくる空間がこの住宅の白眉といえる。

まず東側に大きな窓がある。地窓とも掃き出し窓ともいいがたい、不思議なプロポーシヨン。幅3800mmに対して、高さは1300mmに抑えられている。一般的な既製品としては最大寸法のアルミサッシを使い、隠し框の納まりとする。そしてサッシは、手前に建て込んだ経木簾戸と障子で隠されている。

経木簾戸と障子のレイヤーの組み合わせによって、開口はさまざまな表情を見せ、光のたまりをつくる。竣工から2年半を経て成長したシマトネリコもやさしい影を落とし、外部との関係を感じさせる。床座でくつろぎ、会話を楽しんでいると、この「たまり」がなんとも快適なのだ。

一方、壁面から220mm突き出した上框は、飾り棚として室内に存在感を見せる。また、木格子は幼いお子さんの落下防止のためネジ留めしてあり、将来は簡単にはずせる。

余計な影を消した トップライト

そして、さまざまな形の5つのトップライト。ここでも既製サッシの枠が見えないように、屋根面から500mm以上の距離をとって経木簾戸が嵌め込まれている。広間と吹抜けのものには壁際に設けられ、度絞られた光が壁によって拡散していく。広間の天井高が2400mmと、床座としては高めに設定されたのは、その壁面積を確保するためだったという。

トップライトの形・大きさを変えれば、光の入る強さ・時間が変わる。たとえば、南北方向に長い形は長時間の光が入り、東西方向だとその逆。経木簾戸を通すことで、眺める向きによっても光の強さ・色味は異なる。そうした効果は、下に広がる空間を変えていくことになる。

なにげないデザインだが、壁際にまっすぐな光を落とすため、細部には工夫が凝らされている。トップライトを壁側に寄せようとしても、納まり上、壁からは8cmほど離れて余計な影が出てしまう。そこで、壁全体が内側にふかしてあるのだ。「大きなディテール」でもいえるか。ふかした部分は、平面上では入隅や収納内部で吸収され、部屋から意識されることはない。その厚みは、玄関の引き込み戸や土間の飾り棚に生かされ、赤い小窓にもより強い存在感を与えた。同時に、西と北の壁面がもつ大きな温熱的負荷を軽減している。

光が空間の質を どう変えるか

八島さんたちが発表した住宅を強く印象付けるものとして、多くのスケッチやドローイングが挙げられる。それらは建築の骨格を明瞭に浮かび上がらせ、奥行きを感ぜさせる。同時に、それがパースペクティブで描かれていることに注目しよう。神の視点ではなく、生活者の視点からつねに発想する。その場で生活する人がどのように感じるかに意識が集中されている。

実際の空間に身を置くと、突出したり神経にさわるものがなく、くつろいだ気持ちになれる。「事務所に蓄積した標準ディテールのよなものはなく、設計のたび、必要にかられて考え出している」と八島さんたちは言う。

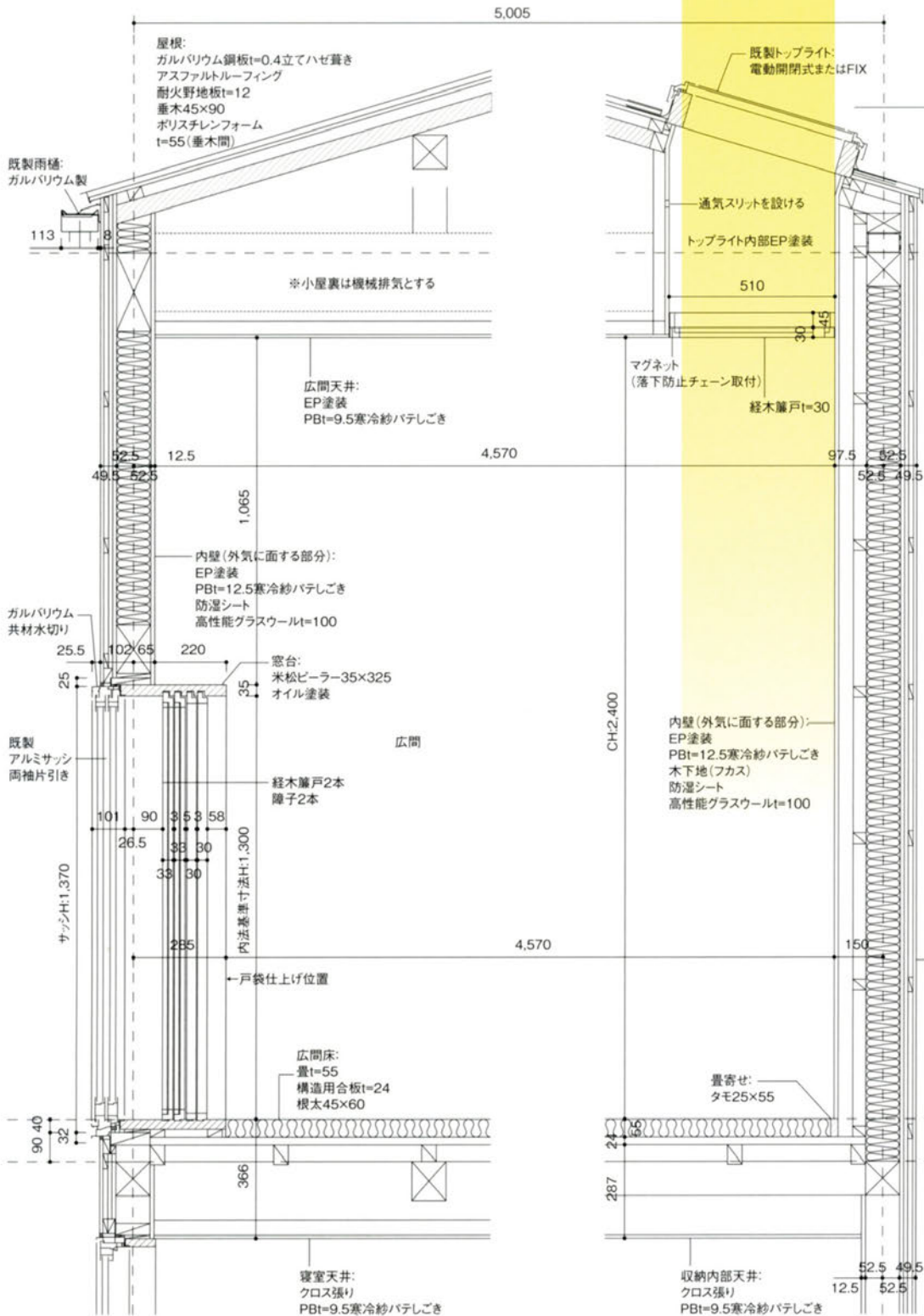
それは同時に、素材を絞り込んで使いこなし、ディテールを磨き抜いてきた、長い蓄積に裏打ちされてのことだろう。余計な線を一つひとつ消し、適切な素材のポリウムを見せる努力は、図面からも感じ取れる。明確で力強い空間構成をとりながら、演出を押しつけられる感じがしない。それらはあくまでも目にやさしい。

「きれいな光を見せたいというより、それがその空間の質をどう変えるかに興味がある」と正年さん、夕子さんは口を揃える。光がどのような生活の場を生み出すか。また、生活をどう楽しいものに変えていくか。この小さな住宅には、豊かな答えが結晶している。

広間開口部・トップライト詳細図

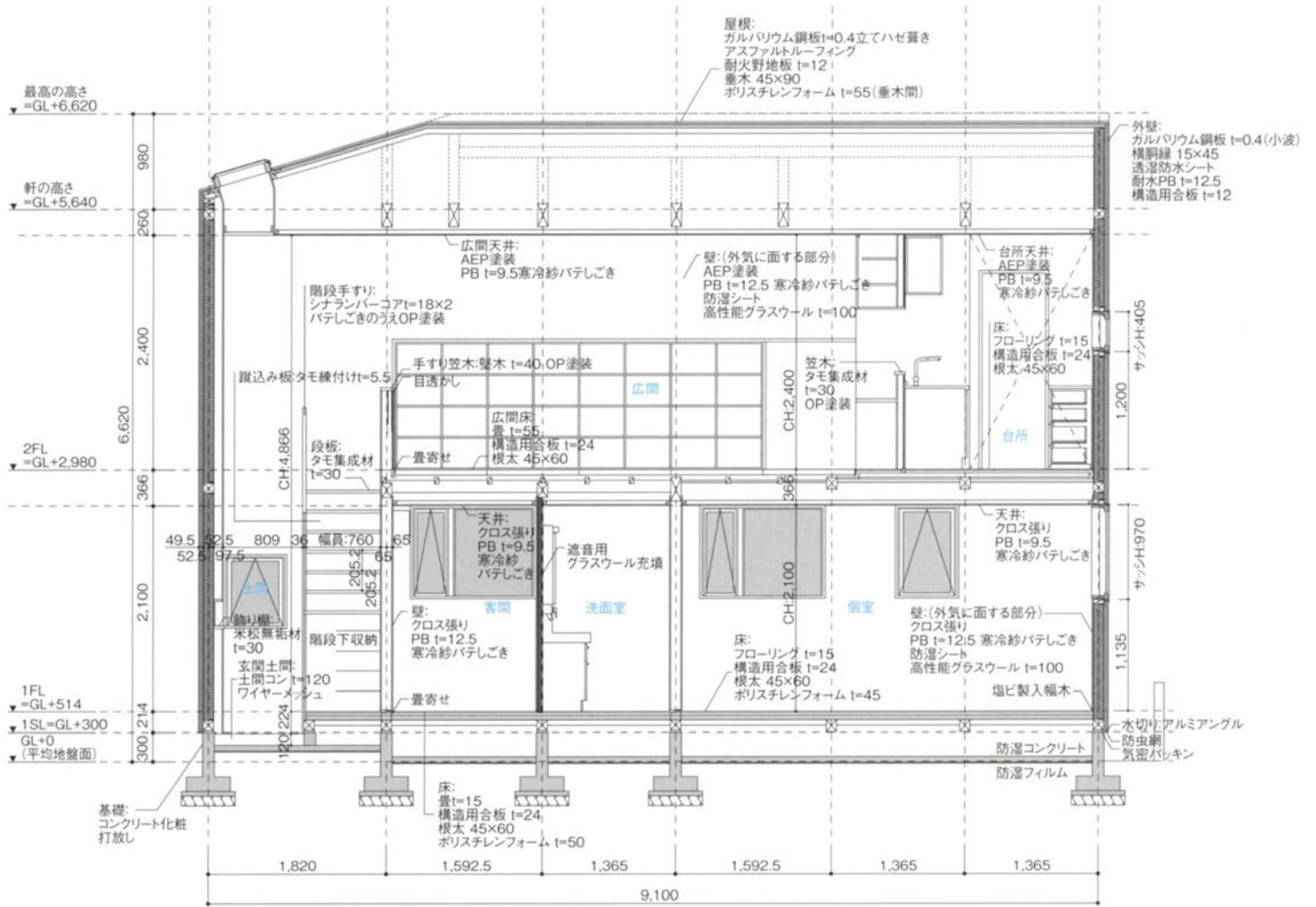
0 20 40cm

1/20



光を束にして

広間と吹抜けの4カ所のトップライトは、それぞれ大きさが異なる。屋根面と天井面との距離が500mm以上とられているので、光を束状に絞り込む効果がある。また、余計な影をつくらず光がまっすぐ壁面に落ちるように、西側と南側の壁を85mmふかしている。一方、高さを1,300mmに抑えた掃き出し窓側は壁をふかさず、上框を奥行き220mmの飾り棚として生かすとともに、壁面に陰影をつけている。



写真右2点/広間開口部の戸袋部分。中/階段から広間と台所を見る。手前の腰壁には広間を閉じる引き戸が仕込まれている。右から3番目と左手台所のトップライトは通風用に電動で開閉ができる。左/掃き出し窓上部は飾り棚として生かしている。



「関前の家」

平面図

0 1 2m

1/150

建築概要

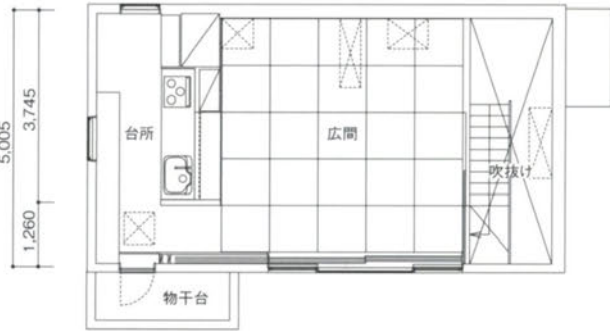
所在地 東京都武蔵野市
 主要用途 専用住宅
 家族構成 夫婦+子ども2人
 設計 八島正年+八島夕子/八島建築設計事務所
 構造設計 八島一暁/八島建築設計事務所
 施工 薩摩建設
 構造 木造
 階数 地上2階
 敷地面積 126.64㎡
 建築面積 48.55㎡
 延床面積 84.99㎡
 設計期間 2008年3月~2009年1月
 工事期間 2009年2月~8月

おもな外部仕上げ

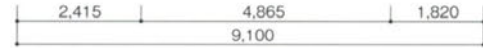
屋根 ガルバリウム鋼板t=0.4mm立てハゼ葺き
 外壁 ガルバリウム鋼板t=0.4mm(小波)
 開口部 アルミ製建具

おもな内部仕上げ

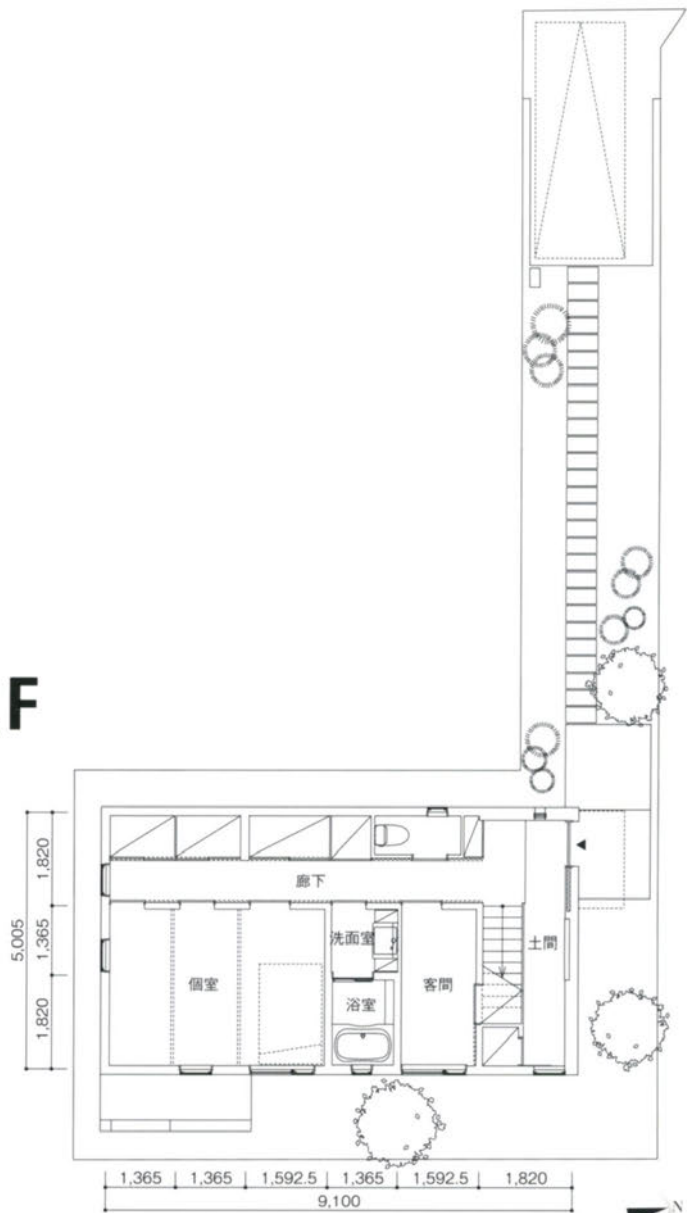
玄関
 床 コンクリート金ゴテのうえ保護材塗布
 壁 天井 AEP塗装(階段手すりはOP塗装)
 広間
 床 縁なし畳敷き
 壁 天井 AEP塗装
 廊下
 床 タモ無垢フローリングt=15mmワトコオイル塗装
 壁 AEP塗装
 天井 クロス張り
 寝室
 床 タモ無垢フローリングt=15mmワトコオイル塗装
 壁・天井 クロス張り



2F



1F



八島正年

Yashima Masatoshi

やしま まさとし(写真左)/1968年福岡県生まれ。93年東京藝術大学美術学部建築科卒業。95年同大学大学院美術研究科修士課程修了。95~96年竹中工務店東京本店設計部。98年八島正年+高瀬夕子建築設計事務所共同設立。2002年八島建築設計事務所に改称。02~05年東京藝術大学美術学部建築科常勤助手。現在、神奈川大学、東京電機大学非常勤講師。

八島夕子

Yashima Yuko

やしま ゆうこ(写真右)/1971年神奈川県生まれ。95年多摩美術大学美術学部建築科卒業。97年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。98年八島正年+高瀬夕子建築設計事務所共同設立。98~2003年多摩美術大学環境デザイン学科助手。02年八島建築設計事務所に改称。現在、多摩美術大学非常勤講師。

おもな作品=「藤沢の家」(08)、「辻堂の家」(09)、「等々力の家」(10)、「牛久の家」(11)、「武蔵野の家」(11)。おもな受賞=01年「ファンタジアの家2」(99)で日本建築士会連合会作品賞。



黙せよ、ディテール

建築の全体と部分の関係をどう考えるか。それがそれぞれの建築家のディテール観ということになるのだろう。横河健さんの場合、要点は、全体との関係性を欠いたまま部分が自律して存在することを排するところにあるようだ。それは横河さんが発する短い言葉に、端的に表れている。

前日の雪が残る「弘中邸」北側外観。下り傾斜のT字路の突き当たりに位置する。道路側はもともと高さ2mほどの擁壁で、その上に住宅が建てられていた。その姿を持続させることが計画の基本となり、40mm厚の中国河北省産グリーンズレートの割肌小端積みの表情が、住宅の基本的な外観となっている。その上の台地の中央に、多面体のボリュームがのっている。

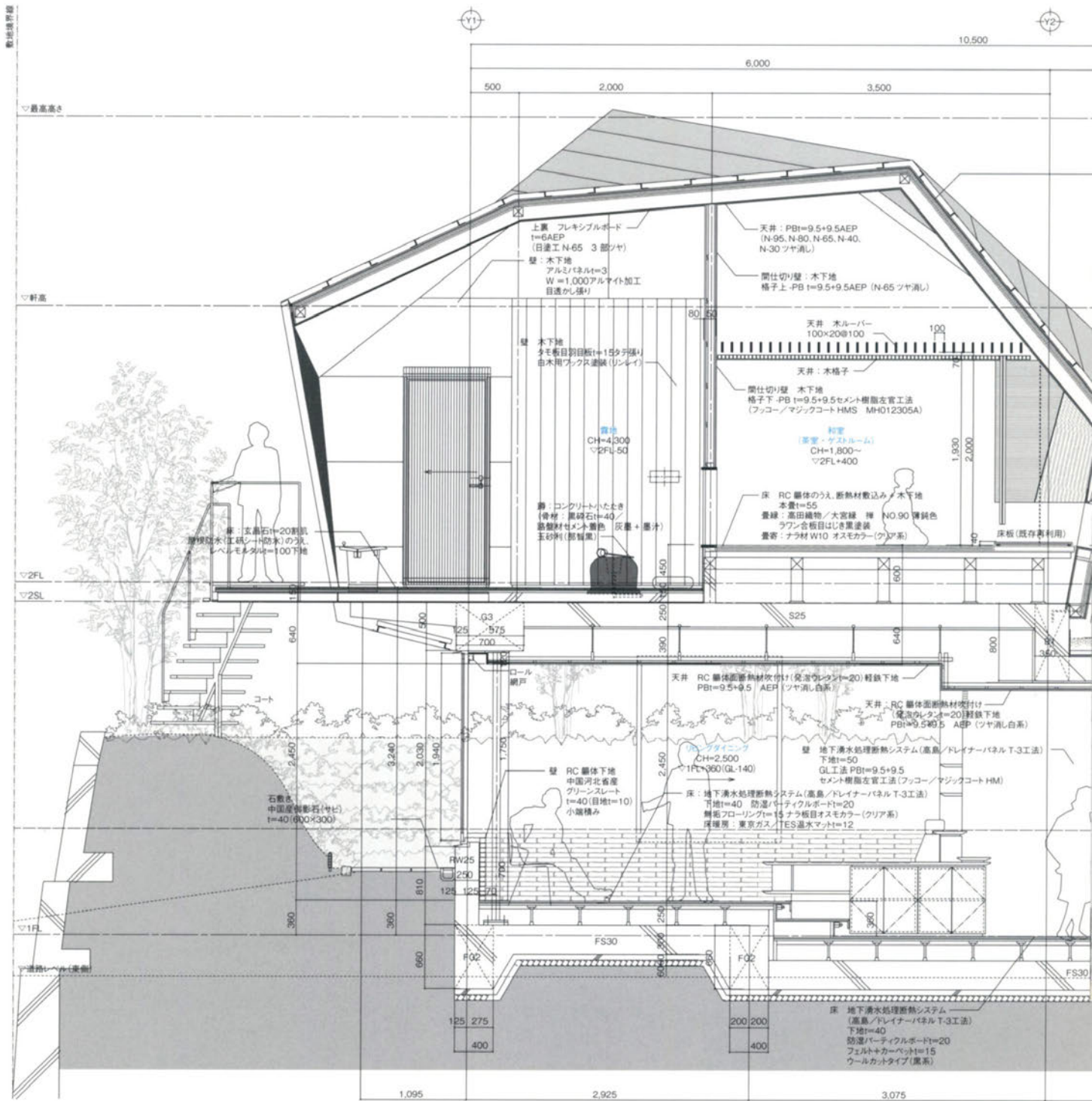
特集／あらためてディテール ケーススタディ2



弘中邸 (多面体・東京)

設計／横河 健

断面詳細図



Special Feature "On Details" Case Study Part



写真中左/2階。茶室と隣り合う、絵を描くためのアトリエ。多面体がそのまま室内に現れる。各面は微妙に異なる5種類の灰色で塗り分けられ、面の切り替えを明瞭にしている。三角形の開口部は開閉式。左/北東側の庭から見る。中央の開口は、茶室前の露地。



「黙せよ」

そう、建築家の横河健さんは言う。

建築は多くの素材から構成される。それらが集まる部分の各々に、必然的にディテールが発生する。放っておけば、素材のそれぞれは気ままに声を発し、ディテールはさまざま自由なポーズをとろうとする。素材は性状も形状も、何もかもが異種、異質であるのだから、それがむしろ自然の成り行きであるともいえる。

しかし横河さんは、それらの素材あるいはディテールに対して、ひとこと「黙せよ」と言い聞かせる。なぜならば建築の全体、空間の全体を形づくっていくようにする筋道が重要であって、素材やディテールには、それに沿って振る舞うことを強く求めるからだ。

とはいえ、全体と部分の関係が 方向というわけではない。全体が部分のありようを規定することもあれば、逆に部分の解決が全体の組み立てに刺激を及ぼすこともある。あくまでも双方向。要点は、全体との関係性を欠いたまま部分が自律して存在することを排するところにある。

日常と非日常を

かつての 構えの中に

電車の軌道に向かってかなり急に下っていく傾斜地の 画に弘中邸の敷地がある。前面道路側はもとも高さ2mほどの擁壁となっていて、その上のところが庭になり、住宅が建てられていた。T字路の突き当たり位置することもあって、擁壁と高みの緑という構



多面体から庭の南側を見る。下部は主室。主室左手からまわりこんで右手の赤い階段を上って茶室へ。日常から非日常へのアプローチ。

えは、地域の人々のあいだに確かな記憶となつて残っているという。近所に長く住む横河さんもそのひとりで、同じ場所に新たに住宅を設計するにあたり、この構えを持続させようと強く思ったのは自然なことだろう。住み手がこの地、この住宅で育った人であつてみればなおさらである。

結果として、日常の住まいとしての機能を満たす空間、すなわち玄関、ガレージ、主室（居間）、台所、個室（寝室）、洗面・浴室は、擁壁の内側に半ば地下の空間として設けられ、その上の台地全体が緑化されている。このようにして、かつてあつた擁壁と高みの緑とい

う構えが再現されている。

台地の中央にぼつんと多面体のポリウムがのっている。光沢を放つアルミ板で包まれた、無窓の、正体不明の立体。かわいらしさと奇妙さが同居している不可思議な立体。それは和室（茶室）とアトリエという日常を離れた感覚で使われる空間を内包している。

視角と触覚への 総合作用

このような全体の大きな構成、つまり基壇があり、その上にあふれるばかりの緑の中央に多面体が存在し、前者が日常、後者が非日常の空間を内側に抱えているという構成の考え方が、部分の、そしてディテールの隅々にまで浸透している。

たとえば基壇を形成する擁壁は、薄い石張りではなく、あくまでも分厚い堅固な石積みであることが追求されている。中国産の緑色スレートの割肌を小端積みとし、コーナーのところでは石の厚みをしつかりと表し、開口部の上端はコンクリートの水平材を積んだ形としている。ガレージのシャッターの縦枠は、通常であれば石壁を欠き込んで設けられるところだが、ここでは石壁からわずかに離して鉄骨を立て、壁の連続性が保たれている。このような配慮を重ねて、純粹な基壇としての表現が得られている。

内部に入ると、外壁とみなされるところは中国産緑色スレートの割肌、内壁とみなされるところはセメント樹脂左官仕上げ、家具的な扱いのところは木質と、平面上では一枚の壁ないし間仕切りであるに変わりがなくても、



Special Feature "On Details" Case Study Part



平面上では
同じ1枚の壁であっても
役割によって素材やディテールに
明瞭な差異がつけられている

写真上右/浴室。トップ
ライトからは自然光。
中/寝室。左/寝室から
小窓越しに浴室を見る。
遊びのデザイン。
引き戸は網張り。

主室全景。グリーン
スレート割肌の壁の立ち
上がりは700mm。家具も
すべて横河さんの設計。



写真上/内壁は基本的
にセメント樹脂左官仕
上げ。下/外壁とみな
される壁(主室南・東
面の立ち上がり壁など)
はグリーンスレートの
割肌。ところどころに
サッシ下枠掃除用のゴ
ミ出し溝が設けられて
いる。



写真上／2階の待合ベンチ。右手の縦格子(引き戸)の奥は、アトリエの出入口で、茶事ではその存在が意識されないようにしてある。下／蹲はコンクリート製で小たたき仕上げ。灰墨と墨汁で着色されている。奥は躰り口。

位置や役割によって、素材もディテールも明瞭な差異がつけられている。

差異化というと、形や光や色といった視覚的なそれが思い浮かぶ。確かにこの住宅でも形や光はもちろん、色についても繊細な配慮がなされている。たとえば、主室の台所側の木の壁は明るく、そこから少し奥まった台所への入り口扉の木は、同じ素材だがわずかに暗色に塗装されている。コンパクトな空間の中で、奥行き感を生み出すための配慮である。2階の天井は三角形の多面で構成されているが、白から黒へ、面ごとにモノクロームの異なる階調で塗装され、面のシャープネスが強調されている。

視覚的な差異化はもちろん単独であるのではない。触感も同時に考慮されている。割肌の石の荒々しさ、左官の壁のわずかな粗さ、木の出隅の角張り、テーブルトップの微細に波打つ木目、ソファの人肌のようなスウェード。加えて、足裏の触感も変化する。目を閉じていても、手触り、足触りで場所の特定が容易にできる。テクスチャーの豊かな旅程。

こうした視覚、触觉への多様な働きかけは、

もちろん別個にあるわけではない。ないまぜになって総合的に作用するのである。そのプロセスのなかで、個々の部位の形状やディテールの仕組みは、すーっと背後に遠のいてゆき、いつの間にか消える。「黙せよ」と言う横河さんの声が聞こえる。

ディテールに 同じ場面は 二度とない

2階はいくらか様相が異なる。露地から茶室、水屋兼シャワー室、アトリエと、天井高、素材、テクスチャー、色、光の制御など、すべてにおいて抑揚が強めにつけられている。それによって、非日常の空間であることが明瞭に意識される。

変形多面体の外観は軒裏までアルミ板でくまるまれ、あたかもアルミの立体が宙から舞い降りてきて着地したよう。そこに上っていく外部階段は赤く塗装され、細い1本の手すりは危うげで、別世界への渡りであることが明

示されている。窓は三角形のアルミパネルがダンバーによって外側に跳ね上げられ、閉めるときには先端にフックをつけた棒を用いてパネルを引き寄せる。

ほかに、茶室として使用されるときには水屋になり、客室としての使用時にはシャワー室に模様替えできるしつらえなど、幾多の精巧な仕掛けや工夫が満載されているのが、この2階の空間である。それでも部分が過剰に前面に出たり、ディテールが勝手な逸脱を見せているところは、ひとつとしてない。その精巧さを誇示したいという誘惑も生じるのではと思うが、そうした場面を目にすることは少ない。横河流のダンディズムである。

ひと渡り見終わった後、空間構成の筋道が決まれば、素材や部分の扱いは手馴れたものにちがいないのだから、後の処理は簡単なものでしようとうっかり尋ねると、横河さんの表情は 瞬にしてくもった。

「経験は山ほど積んでいるけれど、同じ場面は一度とめぐってこないからね。いつも最初から考え、同じように手間ひまかけて検討し、設計するんだよ」



Special Feature "On Details" Case Study Part



写真左／茶室。客室や
仏間としても使用され
る。右手の黒い部分は
仏壇収納。床板は厚さ
30mmの松無垢板。掛け
軸掛けは、厚さ10mmの
強化ガラスにタペスト
リーフィルムを張った
もの。



精巧な仕掛けや工夫が満載でも
部分が過剰に前面に出たり
ディテールが勝手の逸脱を見せない

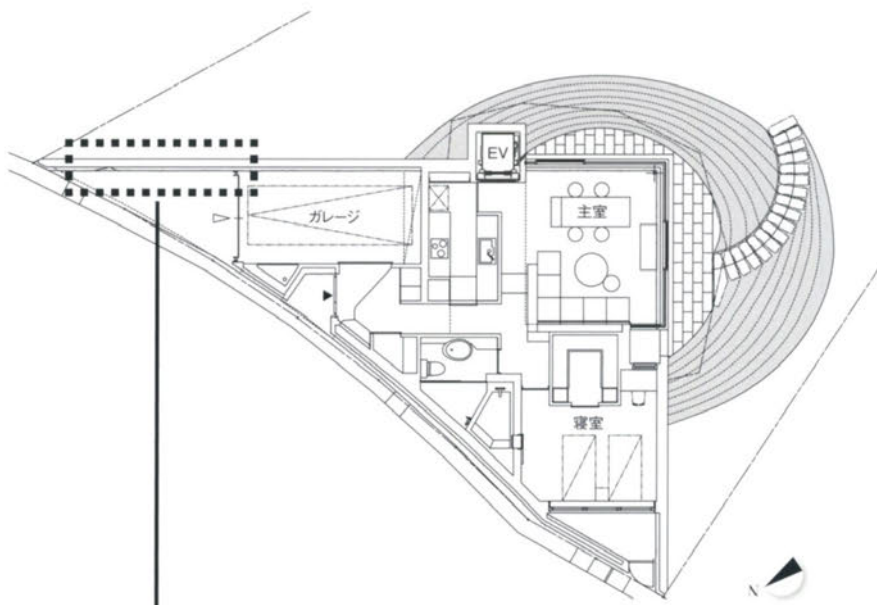
写真右上／水屋。棚や
腰板、竹箆の子などす
べて組み立て式。中上
／茶室を客室として使
用するときは、水屋は
シャワー室になる。中
下／水屋脇のトイレ。
右下／アトリエから茶
室方向を見る。



写真右／左奥の光は開
閉式の地窓。地窓上の
黒い部分は客用布団収
納。天井のルーバー越
しに多面体の面が見
える。左／茶道口は木
製引き込み障子戸（和
紙太鼓張り）。

分厚い石積みを主張する
ディテール

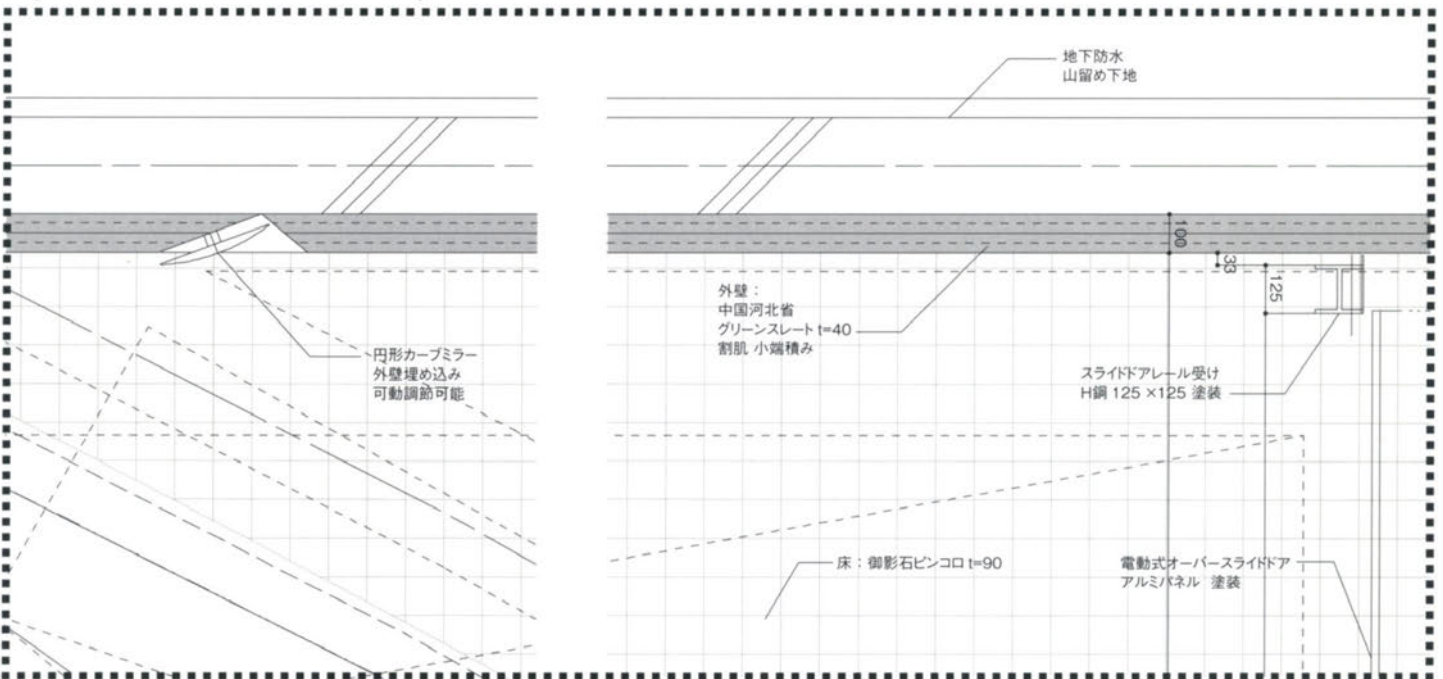
道路側の外壁は、「建築ではなく、もともとあった台地を形づくる擁壁」という考え方から、薄い石張りではなく、分厚い石積みであることが追求された。円形のカーブミラーは、石を彫り込んだように取り付け、グリーンズレートの厚みと存在感を際立たせている。一方、ガレージのシャッター（オーバースライドドア）の縦枠は、壁から33mm離してH鋼を立てて、擁壁としての連続性を強調している。

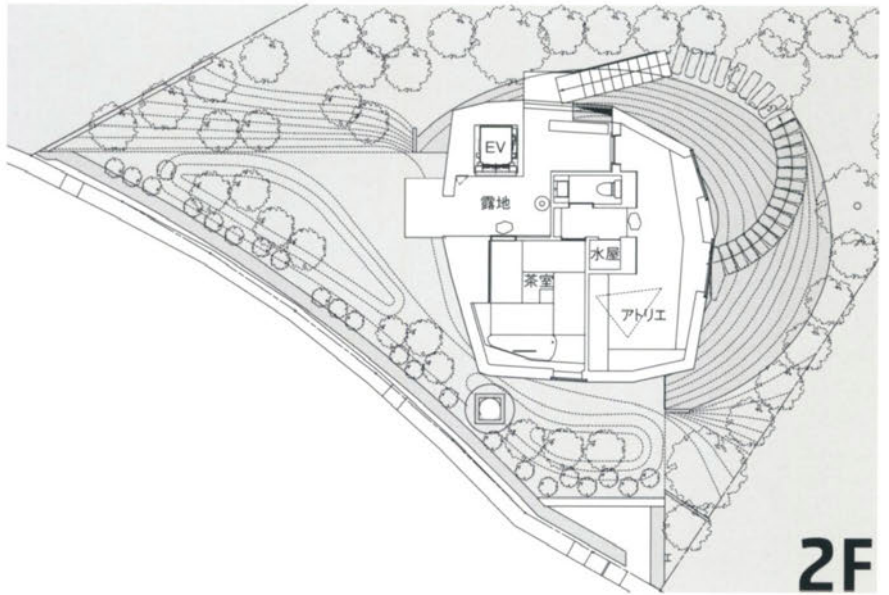


1F

ガレージ壁面詳細図

1/20





建築概要

所在地	東京都
主要用途	専用住宅
家族構成	大人1人
設計	横河 健／横河設計工房(担当:國枝東史生)
構造設計	梅沢建築構造研究所
施工	明工務店
構造	木造立体トラス+鉄筋コンクリート造
階数	地上2階
敷地面積	295.39㎡
建築面積	125.07㎡
延床面積	169.04㎡
設計期間	2009年2月～2010年5月
工事期間	2010年6月～2011年6月

おもな外部仕上げ

屋根	アルミパネルt=3mmアルマイト加工 オープンジョイント、アスファルト防水+屋上緑化
外壁	中国河北省産グリーンスレートt=40mm割肌 小端積み、パネコート型枠コンクリート打放し ランデックスコート塗布
開口部	アルミサッシ、スチールサッシ、オーバードア、 ナラ無垢板t=6mm張り玄関扉
外構	玄昌石t=20mm割肌、 御影石t=40～100mmピシャンおよび割肌、 御影石ピンコロt=45mm

おもな内部仕上げ

エントランス	
床	御影石ピンコロt=45mm フェルト+カーベットt=20mm
壁	中国河北省産グリーンスレート t=40mm割肌小端積み セメント樹脂左官マジックコート
天井	PBt=9+9mmAEP
主室 キッチン	
床	ナラ無垢幅広フローリングt=15mmオスモカラー
壁	中国河北省産グリーンスレートt=40mm割肌 小端積み、セメント樹脂左官マジックコート シナ板目練付合板t=12mm蜜蝋ワックス キッチンパネル
天井	PBt=9+9mmAEP
主寝室	
床	フェルト+カーベットt=20mm
壁	セメント樹脂左官マジックコート
天井	PBt=9+9mmAEP
浴室	
床	玄昌石t=10mm割肌
壁	玄昌石t=10mm割肌
天井	耐水合板t=9mm+檜縁甲板t=12mm 溝加工 オスモカラー
露地	
床	玄昌石t=20mm割肌
壁	アルミパネルt=3mmアルマイト加工 オープンジョイント タモ板目羽目板t=15mm タテ張り ワックス仕上げ
天井	フレキシブルボードt=6mmAEP
茶室(ゲストルーム)	
床	本畳t=55mm
壁	セメント樹脂左官マジックコート PBt=9+9mmAEP
天井	PBt=9+9mmAEP
水屋	
床	ポリコンモザイクタイルt=5mm
天井	耐水合板t=9mm+檜縁甲板t=12mm
アトリエ	
床	玄昌石t=10mm割肌
壁	ナラ板目練付合板t=12mm蜜蝋ワックス PBt=9+9mmAEP
天井	PBt=9+9mmAEP



Yokogawa Ken

横河 健

よこがわ・けん／1948年東京都生まれ。70年ワシントン州立大学交換留学生。72年日本大学芸術学部美術学科卒業。76年設計事務所クレヨン&アソシエイツ設立。82年横河設計工房設立。現在、日本大学理工学部教授。おもな作品と受賞＝89年「日比谷公園前派出所」(87)で東京建築賞、都市計画局長賞、99年「グラスハウス」(98)で日本建築学会作品賞、2001年「CESS／埼玉県環境科学国際センター」(00)でBCS賞、02年同作品で日本建築学会作品選奨、03年「武蔵野市立0123はらっぱ」(01)で日本建築学会作品選奨。04年「トンネル住居」(78)で日本建築家協会25年賞、12年「杉浦邸・多面体 岐阜ひるがの」(10)で日本建築家協会賞。

写真右／北東側外観。左手はガレージ、中央は玄関。中右／カーブミラー。中左／ガレージ奥から道路側を見る。左／玄関。擁壁が内部まで連続する。右のガラスはガレージへの引き戸。把手を目立たせずにガラスの壁として扱っている。



ケールとディテール

約6m×15mの長方形平面、片流れ屋根の平屋。きわめて普通の建物を想像できるが、「宇治のアトリエ」は、明解な建築意図が“少しだけ建物を浮かす”という発想を生み、それを援護するかのように細部の工夫が集まっている。プロポーション、スケール、ディテール。個々は特別なものではないけれど、相乗効果が新鮮な建築を生む例といえるだろう。

西側全景。東側に平等院を臨む場所に立つアトリエで、建て主はランドスケープデザイナーの宮城俊作さん。宮城さんが設計した庭は、現世から聖域への結界のような役割が与えられたという。平屋の建物は、縦2.6m×横15.5mの白漆喰の壁面に、薄い軒先の屋根がのり、水平が強調されたファサード。そして、全体が微妙に地面から浮かんでいる。その理由を建築設計を手がけた長坂大さんは「東側（反対側）の平等院を塙越しに眺めるので、視点を少しだけ高くしたかった」と語るが、結界としての庭とあいまって、不可思議ともいえる風景が生まれている。

Special Feature
"On Details"
Case Study

part



特集 / あらためてディテール ケーススタディ3

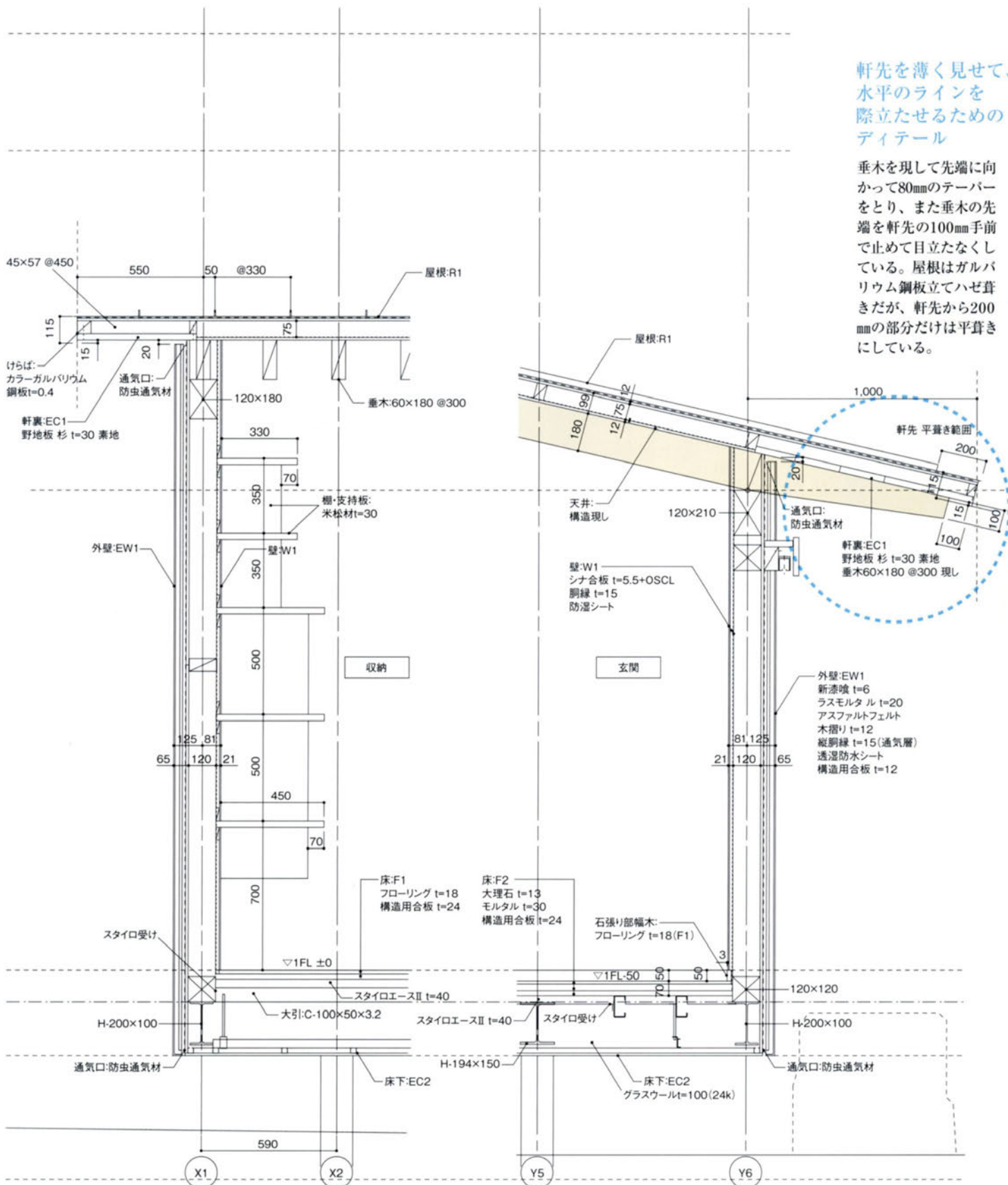
“フシギ”を宿すス

宇治のアトリエ

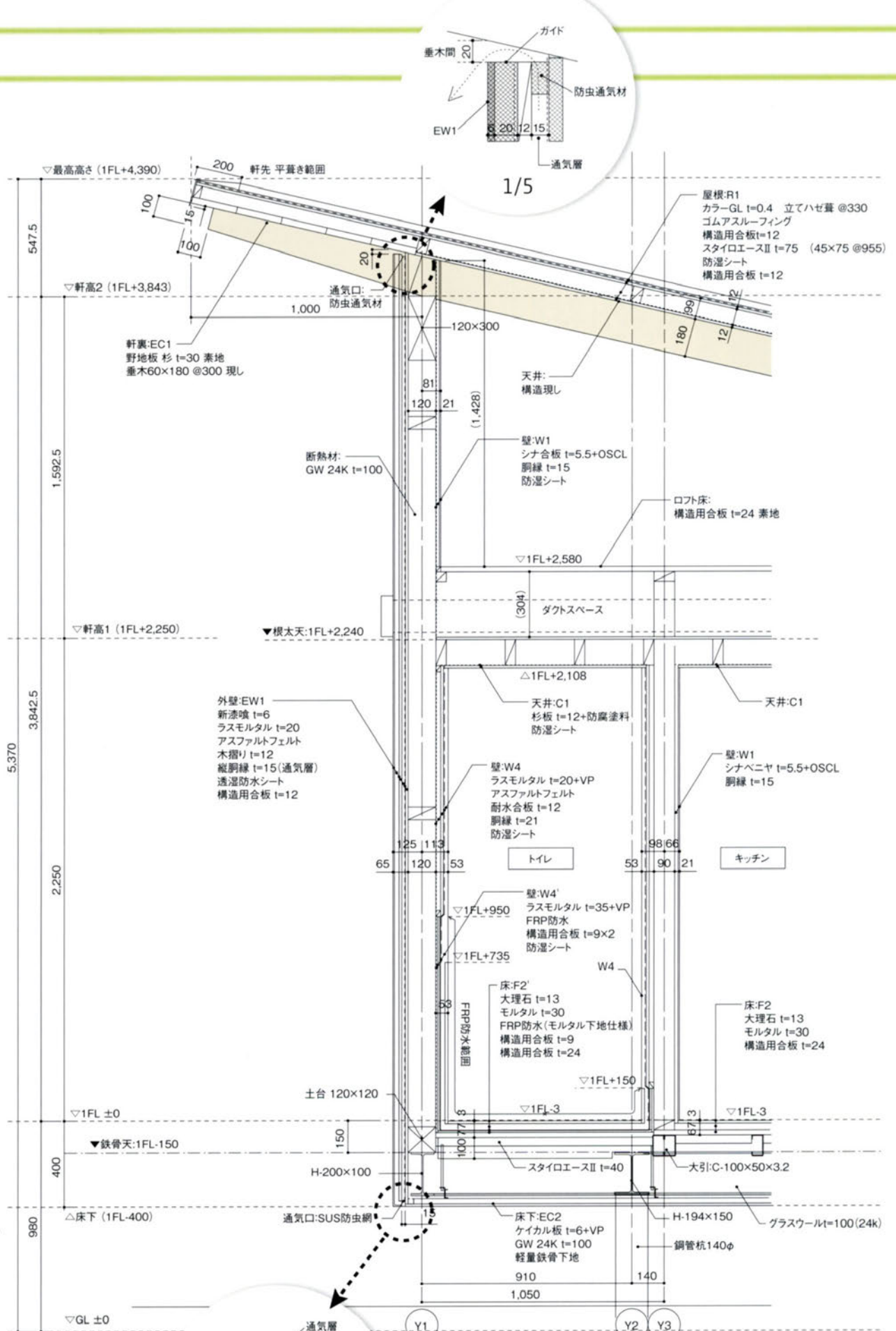
設計(建築) / 長坂 大
設計(外構) / 宮城俊作

軒先を薄く見せて、
水平のラインを
際立たせるための
ディテール

垂木を現して先端に向
かって80mmのテーパ
ーをとり、また垂木の先
端を軒先の100mm手前
で止めて目立たなくし
ている。屋根はガルバ
リウム鋼板立てハゼ葺
きだが、軒先から200
mmの部分だけは平葺き
にしている。



矩計図



建物本体を8本の杭で持ち上げる

建物を浮かせたいという建築意図と、軟弱地盤対策が、杭を打って建物全体を持ち上げるという発想を生んだ。地表との隙間は土地の傾斜や起伏によって330mm~660mm。鋼管杭は140φ・長さ4,600mm~4,930mm、数は短手2本(@4,550mm)×長手4本(@4,700mm)の計8本(それとは別にデッキ支柱杭として1本使用)。表通りから入ってくる道路が幅2mあまりと狭く、この道を通れて5m長の杭を打てる機械があるかどうかを事前に調べたところ、関西地区で2社だけ所有していたという。ちなみに、鋼管杭による乾式基礎工法は傾斜地で有効で、長坂さんの別の現場でも進行中とのこと。

シームレスな漆喰仕上げ

外壁4面にシームレスにつながる漆喰仕上げは、そのまま床下面38mm奥までまわり、それぞれの角は現場で指示した半径3mm~4mmのアルとなっている。

この仕上げもあいまって、奥行きが無限にあるようにも、まったく見えないようにも見えるという、両義の見えがかりの「浮かんでいる白い壁」が生まれている。



写真上／荒々しく豪快な石組みを渡って玄関へ。中／片引き吊り戸の玄関。板が壁にぶら下がるようなディテール（45ページ詳細図参照）。下／熊笹の茂み、株立ちの山桜、碎石、手水鉢、木のデッキ、地窓という構成。デッキは本体と一体化して床下からH鋼で持ち出し、鋼管杭140φ×1本で支持している。

いかにも軽やかな構築物が地上高くを持ち上げられているのならともかく、重厚なボリウムが大地から切り離されて浮かんでいる姿に接すると、意表をつかれ、驚かされることしばしばである。たとえば、本体が強引に地表から持ち上げられている正倉院、一連の入母屋の屋根をもつ本体が丸ごと宙に浮かんでいる吉備津神社本殿。それらと比べると豆粒のように小さいが、やはり浮かんでいるがゆえに驚きをもたらし、その意義を問うてみたくなる建築を訪れる機会があった。

京都、宇治川のほとりにある平等院。東を向き、朝日を迎えるように立っている鳳凰堂の背後は、宇治川の河岸段丘の段目にあたる崖となっている。その崖の上、鳳凰堂の真後ろに、目指す建築がある。宇治のアトリエ。建築設計は長坂大さん、ランドスケープは宮城俊作さん。宮城さんは施主でもあり、平等院の住職のひとりでもある。敷地を見るなりすぐに決まったと長坂さんが言うように、建築の配置と構成の方針は素直である。前面道路側に広い庭を配し、その

奥に長方形平面の平屋を建てる。庭側（西側）の軒はできる限り低く抑えて圧迫感を減じ、反対側（東側）の軒は高く上げ、室内から鳳凰堂の屋根越しに遠方の山並みを望めるようにする。

建築は背景として

外観の主役は庭。建築は背景としての書割にとどまる。幅19m、奥行き9mの整形の庭には、境界としての役割を与えようとしたと宮城さんは言う。現世から聖域へ。そのため水面をつくり、橋を架けて向こう岸に渡る案も検討されたが、熊笹の茂みを渡っていく現状の姿に落ち着いた。

庭を構成するエレメントは限られている。熊笹の葉と碎石が形成する水平面、象徴的に配された3本の株立ちの山桜と敷地両端の生け垣が形成する鉛直軸。それらを基調に、入り口の段になる石組み、手水鉢、木のデッキ、掘り込みの縁の瓦と石積みが景色をつくっている。エレメントはこれだけだが、豊かな景

観である。その理由はさまざまあるが、なによりも配された石がそれぞれ固有の風合いと存在感をもっているからだろ。整った形ながらやわらかな表情をたたえた延段、その先、いきなり急峻な溪谷の奥深くに踏み込んだような荒々しく豪快な石組み、そして長い時の経過を円やかな石肌に刻み込んだ手水鉢。鮮やか、華やか。

思うにランドスケープのディテールとは、部分的な納まりにも増して、葉や枝などを含めたエレメントそれぞれのテクスチャーの多様性にあるのではないか。季節や天候の移り変わりがテクスチャーに鋭敏に反映されるので、多様性そのものが揺れ動いてやまない。ランドスケープのディテールの妙味である。

微妙に浮かぶ 白い壁

建築は15・5m×6・5mの長方形平面、濃灰色の鋼板の片流れ屋根、雨樋をなくし、

地表に舞い降りたようにも

地表を離れて平等院に向かい

滑り降りていくようにも見える姿

南西側から見る。外壁の漆喰仕上げは床下の一部にまでまわされ、建物の見え方にかかわっている(39ページ矩計図参照)。取材当日は雨で、デッキの色の違いで雨のあたる範囲がわかる。



Special Feature "On Details" Case Study Part



視線を低くして西側壁面の北端を見たところ。床下を通して東側の生け垣の足元が見える。軒先から100mm引っ込ませた垂木が軒先をシャープに見せている。



南側外観。右手東側の平等院への眺望を確保するための片流れ屋根。「単純でありふれた形態を選ぶことで、場所の特性はむしろ見えやすくなることもある」と長坂さんは言う。



北側壁面と床下。建物全体を持ち上げる鋼管杭が見える。杭は建物本体部分で8本。地表との隙間は土地の傾斜から330mm~660mm。砕石が床下全面にも敷かれていて、庭が建物の下にまで延びているような印象を与えている。

現しの垂木にテーパーをかけて薄く見せた水平の軒、白漆喰の外壁。

庭側の壁にはガラス開口が2カ所、木の扉がふたつ。プロポーションが頼りのシンプルな構成である。背景としての書割と記したように、この壁面は1枚のスクリーンで背後に空間がないようにも見えれば、途方もないボリュームが背後にあるようにも見える。この両義的な見えがかりをもつ壁は、地表面から持ち上げられていることで、さらにフシギが増している。地表との隙間は土地の傾斜から、33cm×66cm。持ち上げられているというにはいささか狭く、隙間というにはかなり広い。微妙な間隔である。

設計者によると、持ち上げた理由は、ひとつには地盤がよくないので杭を打つ必要があり、それならば床面を高く浮かせてもよいだろうという判断、ふたつには室内からの眺望の具合から床のレベルを高く設定したかったからという。しかし、どちらも決定的な理由とはいえない。

重量感に富んでいるわけではないが、決して軽やかではない白い壁面が中途半端な高さに浮いている。無意識のうちに以前に見たことがあるものと比較して判断し、評価をするのが人の常だが、比較対象が浮かばない。違和感が残る。なにかヘンだが、どこがヘンなのかわからない。しかし地表に舞い降りたようにも、地表を離れて平等院に向かい滑り降りていくようにも見える姿は、見直すことに格好よい。設計者の術中にはまってしまっている。思えば、すべてがフツウの範囲内にとどまる限り、現世の領域にあるしかない。橋を渡った向こう側は聖域にして異界なのだから、どこかにフシギを宿すことが意図された



のではないか。

働きにふさわしい デイテールを与える

内部は大らかな清々とした空間で、大きなフシギは見当たらない。

小さなフシギのひとつは、玄関を入った正面にキッチンの扉があり、キッチンを通り抜けた先にトイレがある構成だろうか。このゾーンだけ床が大理石とされ、キッチンとトイレは一体の箱のような扱いで、壁は艶のあるスタッコ磨き仕上げ。

もうひとつの小さなフシギは、現しになっている梁の位置が外壁から90cm内側であるが、梁を支える柱が隠されるか、巧みに処理されているために、構造体の仕組みが明示されているような、いないような、半端な具合になっていること。

デイテールの志向は4つの開口に明らかだ。各々の開口の機能は明瞭に特定され、相応の

形、大きさ、デイテールが与えられている。

執務室であるスペース1の東の窓は天地左右杯の思い切り大きな開口でフィックス。陽光がさんさんと射し込み、遠方の山並みを望める。西の壁には小さな窓。延段を渡ってくる人の気配を知るための覗き窓の役割で、幅16cmと最小限。作業室であるスペース2の東の窓は、腰が135cm、高さ80cm、両側が片引き。遠景と中景がちょうどよく切り取られている。反対の西側の窓は、高さ115cmの地窓で、近景の庭の様子が枠どられている。片引きの扉があつて、デッキに出られ、夏季は通風を得ることもできる。

特定の働きに対して特定の形、大きさ、デイテールを与える。逆に、働きが明瞭に特定されていない部位は決して設けない。あらゆる観点から、無用を取り払う。宇治のアトリエではそれが徹底されているが、それこそミニマリズムの真の精神かと思う。むやみに形を整理しようとしたり、わけもなく仕上げや色を減じてみたり、過度の禁欲を強いたりするのがミニマリズムなわけではない。

写真上/スペース1からスペース2方向を見る。あいだに玄関(右)と、キッチン・トイレ・シャワースペースが入るボックス。天井は構造現し。下右/上の写真の見返し。下左/梁と柱の接合部。柱をシナベニヤで囲み、間仕切り壁の上に梁が軽くなるような表現にして、梁の水平方向の伸びを強調している(上の写真の正面奥の部分)。



スペース2 東側の水平窓は開口高さ800mm、下端は床から1,350mm。



写真上／キッチン内から玄関を見る。右／スペース1から見た全景。



西側の地窓が庭の風景を切り取る。開口高さは1,150mm。



Special Feature "On Details" Case Study Part

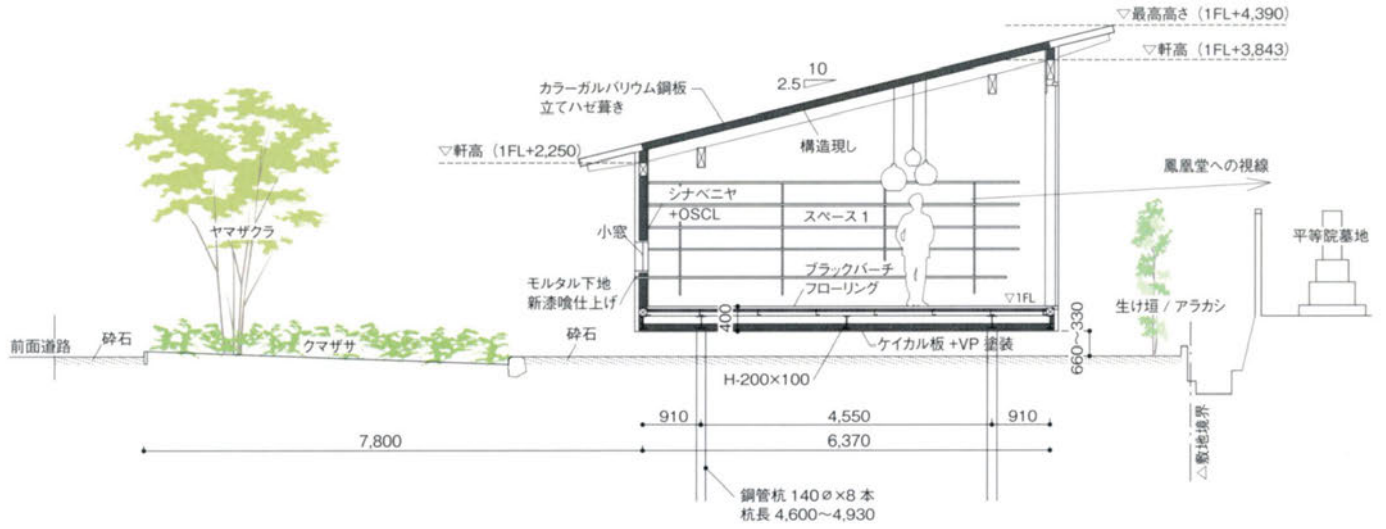
各々の開口の機能は明瞭に特定され、
相応の形、大きさ、ディテールが
与えられている

スペース1。東側全面開口から平等院と山並みが見える。一番奥の屋根が鳳凰堂。幕地の塀越しの視線を調節する目的もあって、床が持ち上げられた。右手キッチン・ボックスの上部は、見切りに2mm厚のステンレスのフラットバーを使ってエッジを立たせ、空間を引き締めている。同時に、エアコンまわりもステンレスで囲んでシャープな表現に。

断面図

0 1 2 3m

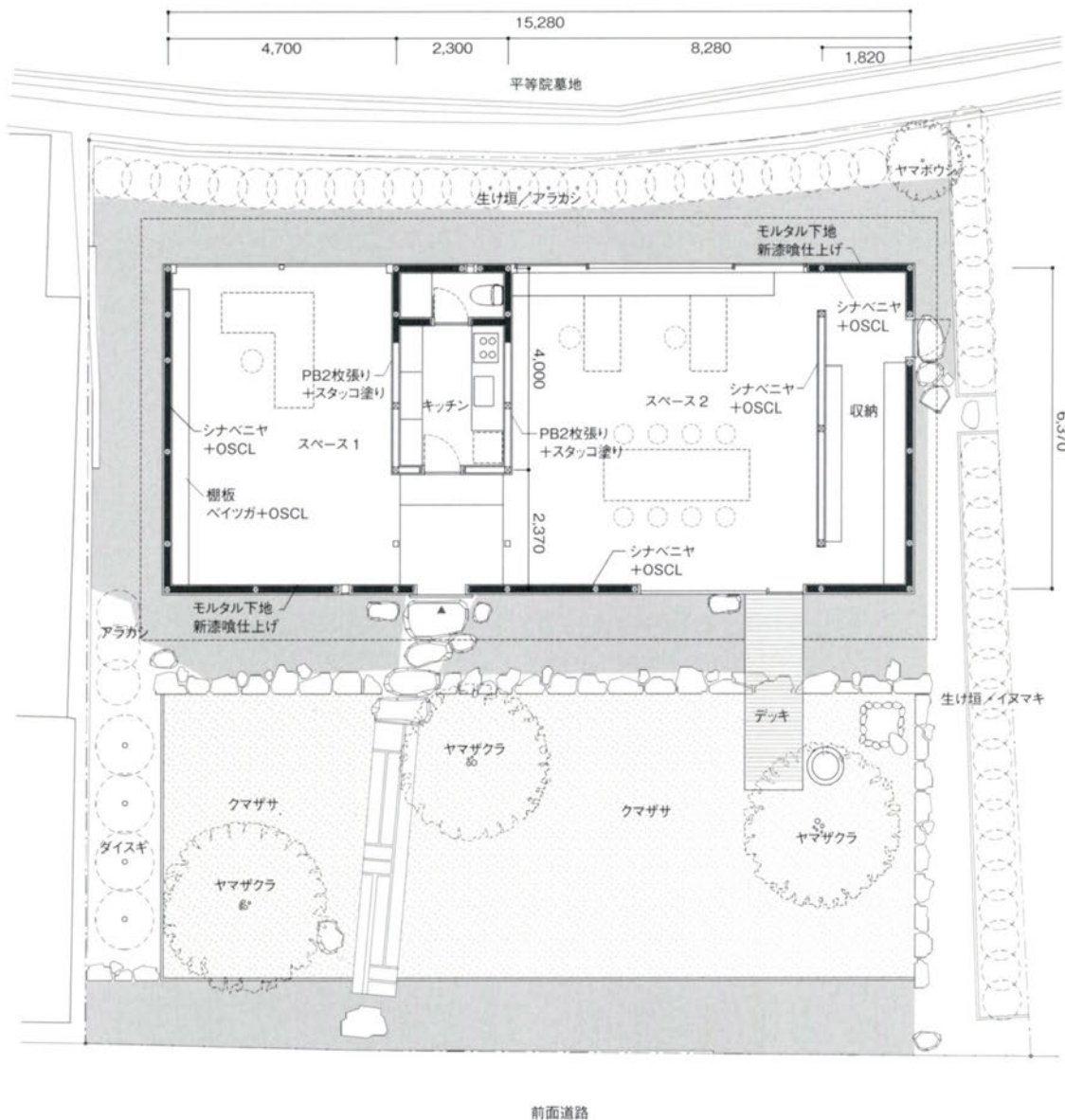
1/120



平面図

0 1 2 3m

1/150



「宇治のアトリエ」

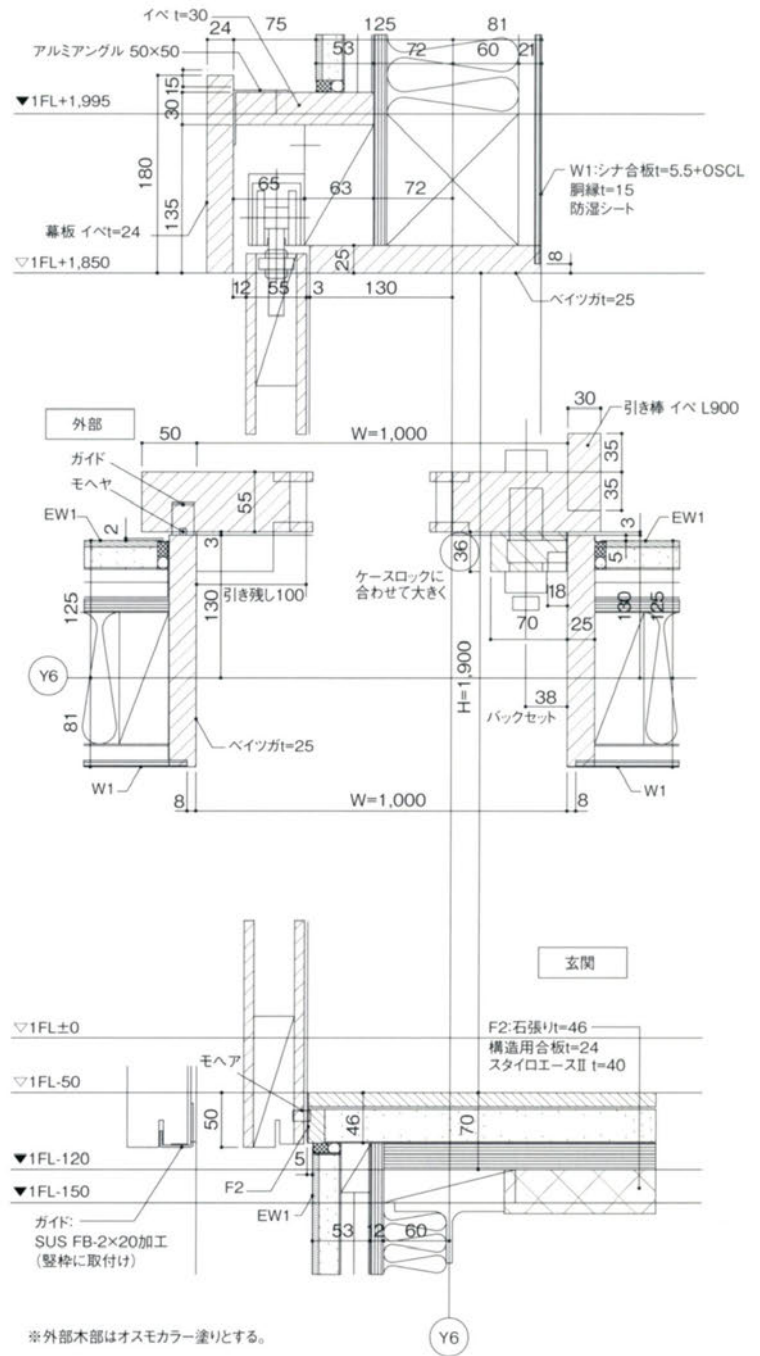
玄関の吊り戸詳細図

0 5 10cm

1/7

建築概要

所在地	京都府宇治市
主要用途	アトリエ
設計(建築)	長坂 大/Mega
設計(外構)	宮城俊作/PLACEMEDIA
構造設計	門藤芳樹構造設計事務所
施工	ミナミ建設
構造	木造(鋼管杭基礎)
階数	地上1階
敷地面積	327.36㎡
建築面積	97.33㎡
延床面積	97.33㎡
設計期間	2007年11月~2008年6月
工事期間	2008年7月~12月
おもな外部仕上げ	
屋根	カラーガルバリウム鋼板立てハゼ葺き
外壁	モルタル+新漆喰塗り
開口部	木製建具、スチールサッシ
外構	自然石敷延段、雑石積み、碎石敷き、ヤマザクラ、クマザサ
おもな内部仕上げ	
スペース1	スペース2
床	ブラックパーチ
壁	シナベニヤOSCL
天井	現し
キッチン	トイレ
床	大理石水磨き仕上げ
壁	ガルバリウム鋼板 モルタルVP
天井	杉板



長坂 大

Nagasaka Dai

ながさか だい(写真右)/1960年神奈川県生まれ。82年京都工芸繊維大学住環境学科卒業。85~89年アトリエファイ建築研究所。90年Mega設立。2003~07年奈良女子大学人間環境学科准教授。現在、京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授、工学博士。おもな作品=「紫野の家」(2000)、「等持院の家2(改修)」(04)、「岩見沢の家」(06)、「おざわ歯科」(08)、「淡路島の家(改修)」(09)、「富士見町の家」(10)、「明石町の家」(11)。

宮城俊作

Miyagi Shunsaku

みやぎ しゅんさく(写真左)/1957年京都府生まれ。82年京都大学大学院修士課程修了。86年ハーバード大学デザイン学部大学院修了。92年千葉大学緑地環境学科助教授。2001年より奈良女子大学生活環境学部住環境学科教授。92年より設計組織PLACEMEDIAパートナー。おもなランドスケープデザイン作品=「川口並木元町公園」(06)、「ザ ペニンシュラ東京」(07)、「パークハイアット北京」(07)、「ザ キャピトルホテル東京」(10)、「東北大学センタースクエア」(11)。

ふわっと 室内に 入るために

玄関は、重厚な石を渡ってきた後に、軽くふわっと室内へ入るという考え方で、片引き吊り戸を採用。下部にはガイドレールを設けずに、幅20mmのステンレス金物1点でガイドとし、外壁にぶらさがったような見え方。浮かんだ建物に合わせた浮遊感を得ている。

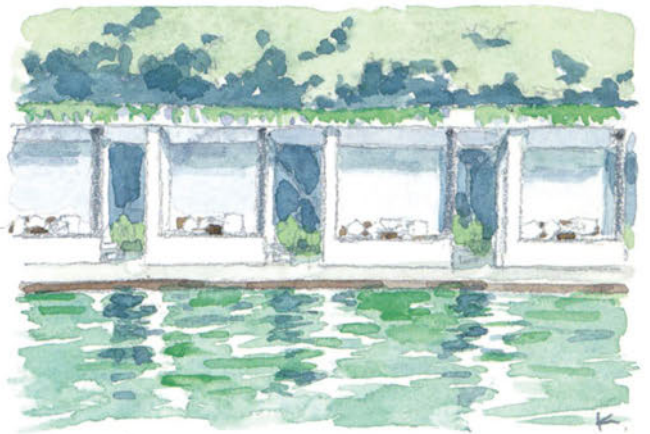
コロニアルという言葉はローマ帝国がドイツのケルン (Cologne) を植民地にしたことに由来するが、およそ「いいホテル」と目されている伝統的なホテルは、植民地という、地元にはつらい時代につくられたホテルに多い。きつとサービスの真髄を心得ることになったのだろう。とくにオリエンタルといわれる東方のものは、植民地として支配された国でなくとも19世紀から20世紀初頭につくられたものがそうである。

スリランカ・キャンデイにあるクイーンズ・ホテル(1849)、カルカッタのグレート・イースタン(1850)、シンガポールのラッフルズ(1887)、グッドウッド・パーク(1906)、イスタンブールのベラ・パレス(1892)、香港のペニンシユラ(1928)、ホーチミンのマジエスティック(39)等々、たくさん。

このホテルはインド洋上の島国、スリランカの街・ゴールのフォート(砦)の中にあつて、1684年、支配していたオランダが軍の総司令部として建設したというから、かなり古い。徳川5代將軍綱吉の頃だ。この国はポルトガル、オランダ、イギリスから400年以上も支配を受けつづけ、1972年にイギリス連邦自治領セイロンから独立して現在の国名に変えた。城砦の中の旧市街はよく遺つていて世界遺産。

1865年、「ニュー・オリエンタル・ホテル」として開業、最近、28室のアマンガッタとなった。白い3階建て。ずいぶん手を入れられているようだが、エントランス左右のオーブ的なベランダやダイニングルームなどは家具もアンティークを集め、往時の面影を彷彿とさせる。

熱く乾いた空気を天井のファンがけだるくまわって微風に



スイミング プール

変え、甘い香水や花、ココナッツ、カリパウダーの香りが混じる。スチュワードはサローン(*1)を腰にまとい、裸足やサンダル姿。いつの間にか200年くらいタイムスリップしたような錯覚を覚える。時折、前面のチャーチ・ストリートを白い制服の女学生が騒ぎながら行き交い、オート三輪がけたたましい音を上げて行きすぎて、現代に引き戻される。後方にあるガーデンはすっかりコンテナポラリー・デザインで、デザインはケリー・ヒル(*2)。それほど広くないスイミング・プールに大きな樹木が緑陰を落とし、プールサイドのセパレートされたセルでは昼寝を楽しむことができる。私は、妻たちがアーユルヴェーダ(*3)に出かけているあいだに、ちよつと泳いでから水彩パレットを取り出したが、

前面道路に面する2階の、天井高5mを超える宿泊室は、長さも約13mあり、じつに長い。レーザー距離計は必携。床にはレベル差もある。カーテンはなくて室内に折り戸。大きな窓は縦軸回転。ベッドに並んでバスタブがオープンに置かれ、バスルームはない！ シャワー室にもドアがないから、新婚向きというかカッブル向きとか……老人向きとは言いがたい。パトラが部屋をつぶさに説明し、ロウソクを灯す「儀式」を行って、いつでもなんでもお申しつけくださいとメモを残していく。

実測にいつもより時間がかかった。さて、冷たい飲み物でもいただいで、東インド会社の残像を探して散歩するとうか。

アーユボワン(こんにちは)と言いながら……。

*1/サローン 巻きスカート

*2/Kerry Hill (1943) オーストラリア生まれの建築家。その活動はアジアのアマン系ホテルを中心に広域におよぶ。

*3/Ayurveda インド大陸発祥の医学。アーユス(生氣生命)とヴェーダ(知識学)の複合語。頭部の浄化、オイルマッサージなどを含む。

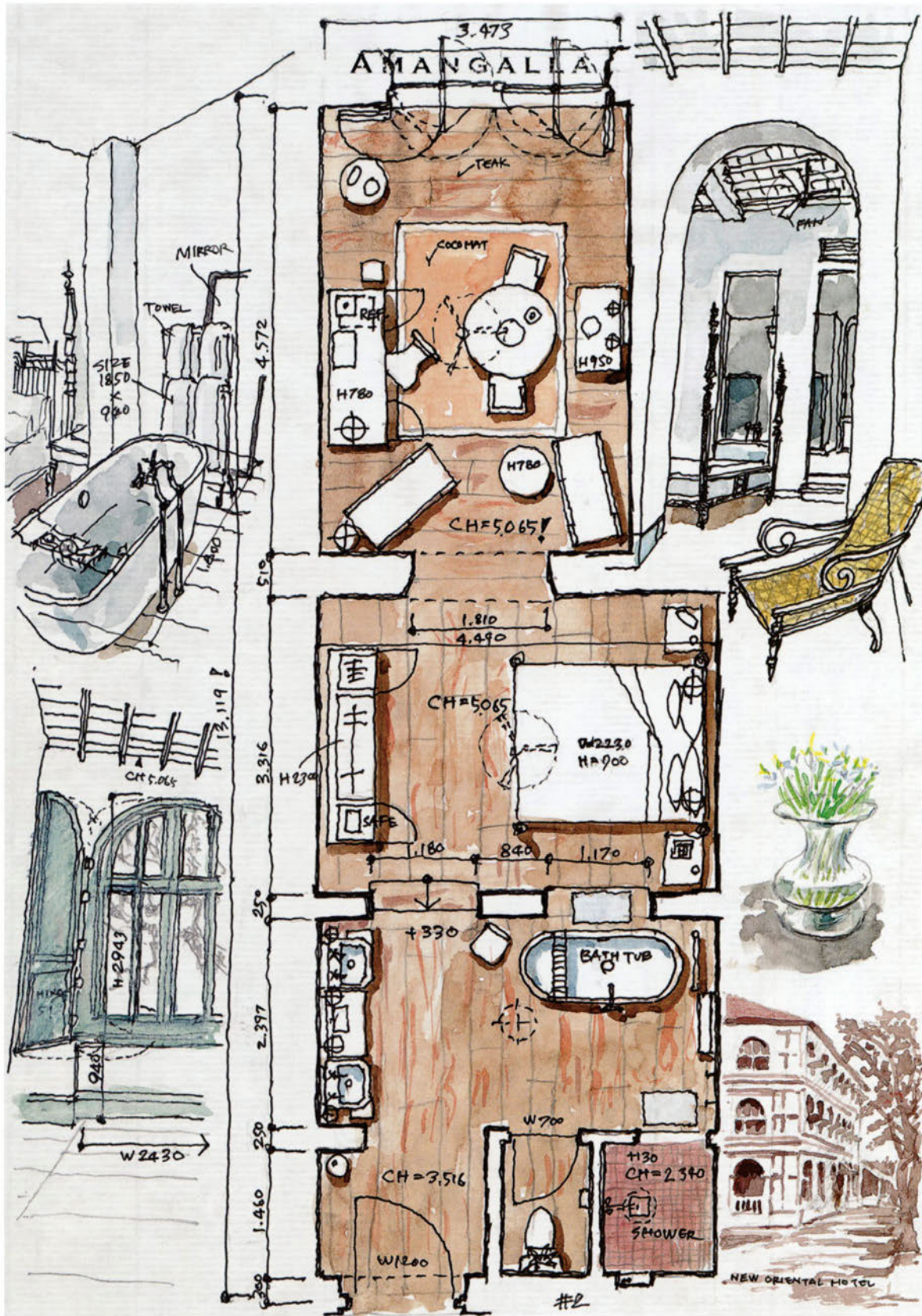
ホテル竣工年出典 "GREAT ORIENTAL HOTELS"

バスタブは湯を張ったベッド



ウエルカムフルーツは
マンゴー、パパイヤ

うら かずや/建築家 インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京芸術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99~2012年まで日建スペースデザイン代表取締役。おもな作品=「ロテル ド ロテル」(88)、「ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル」(91)、「飯綱山荘」(91)、「ホテルモリノ新百合丘」(97)、「メディアージュ」(2000)。著書に「旅はゲストルーム」(東京書籍 光文社)がある。



長く高いゲストルーム

Add / 10 Church Street, Fort, Galle, Sri Lanka

Tel / 94 91 2233388

Fax / 94 91 2233355

E-mail / amangalla@amanresorts.com

URL / www.amanresorts.com/amangalla/home.aspx

Room Charges / Bedroom US\$500 ~ 700

Chamber US\$550 ~ 750 / Suite US\$625 ~ 825

Amangalla Suite US\$1,000 ~ 1,100

The Garden House US\$1,400 ~ 1,500

1S=82.78円(2012年3月23日現在)

AMANGALLA

結

H Residence

晶

化

し

た

箱

「自邸」 設計／穂積信夫

2/室内の理想の光景を、われわれのために用意してくれた。サーレネンのテーブルと椅子、そして天井のわずかな持ち上がり、壁に掛かるのはマーク・ロスコの絵。戦後のアメリカ的空間にはかならない。1階の当初棟の天井をすべて扁平ピラミッド状に持ち上げたかったが、コストがかさみ、食堂部分しか持ち上げられなかったという。



雑

誌を通して知ってはいませんが、見るまでは心配だった。箱状の基本単位を並べて構成された家だったからだ。

私は故・大野勝彦が積水化学工業と組んで開発した「セキスイハイムM1」の6箱構成の家に20年ほど暮らし、あれこれ考えた。20世紀において、技術的、経済的合理性を純粹に追求すると建築は箱と化すが、その箱は人にどんな印象を与えるのか。答えは、良くも悪しくも美しくも醜くも感じないし、それゆえ腹も立たない。表現というやっかいなものが付着していないからだ。巨匠でいえば、ミースと比べたときのグロピウスの蒸留水のごとき建築といえはいいだろう。

でも、それではあまりに寂しい。20世紀の箱でありながら、毎日暮らす人には、そこはかとなく味わいが感じられるミネラルウォーターのごとき建築は、どうすれば可能なのか。

セキスイハイムに住んでみて、こうした問いを抱えていたから、下落合駅で降りて穂積邸に着くまで心配だった。ただの箱の並びにしか見えなかったらどうしよう。

低い扉越しに箱の角が見えた段階でひと安心。木の梁の角の交差が心地よく映る。木という材質と、材と材の組み合わせという木造建築ならではの表現に目が反応したのだ。





5 / 1階増築部分から庭を見る。増築もまったく同じ。空間単位を繰り返しており、元からあったか増築かはわからない。1単位の室内から同じ単位の外観を眺める体験は、ありそうでない。



6 / 当初棟の突き当たりの寝室の先に、増築棟の2単位が見える。



2

庭側にまわって全景を眺め、ひとつ反省した。同じ形が並ぶから箱とばかり思っていたが、並んでいるのは箱というより単位なのだ。木の枠でつくられた空間の単位が並んでいる、そう感じられた。同じ四角なのに、セキスイハイムM1は箱、目の前にあるのは空間の単位、と別なものに映る。その差は具体的には何に由来するのか。この問いを宙吊りにしたまま、中に入って穂積先生から設計時の話を聞いた。

とにかく寸法にはとことん付き合ったという。たとえば、10 cmの柱を2 m 70 cm (1・5間) の内法で立ててひとつの単位とするとして、単位同士の間隔は何cmが正解なのか。単位と単位のあいだにすべての収納を納める考えでスタートしたから、あだやおろそかにはできない。日本の木造では伝統的に収納は奥行き3尺に決まっているが、布団を入れないとすると無駄になる。ハンガーに掛けた服、大小さまざまな本や雑誌。1 cmも無駄にすまいと検討に検討を重ねた結果、85 cmが導かれる。背中合わせで本と洋服がギリギリ納まる。こうした寸法の検討が平面、立面、断面、部材のすべてについてなされて設計が決まった。

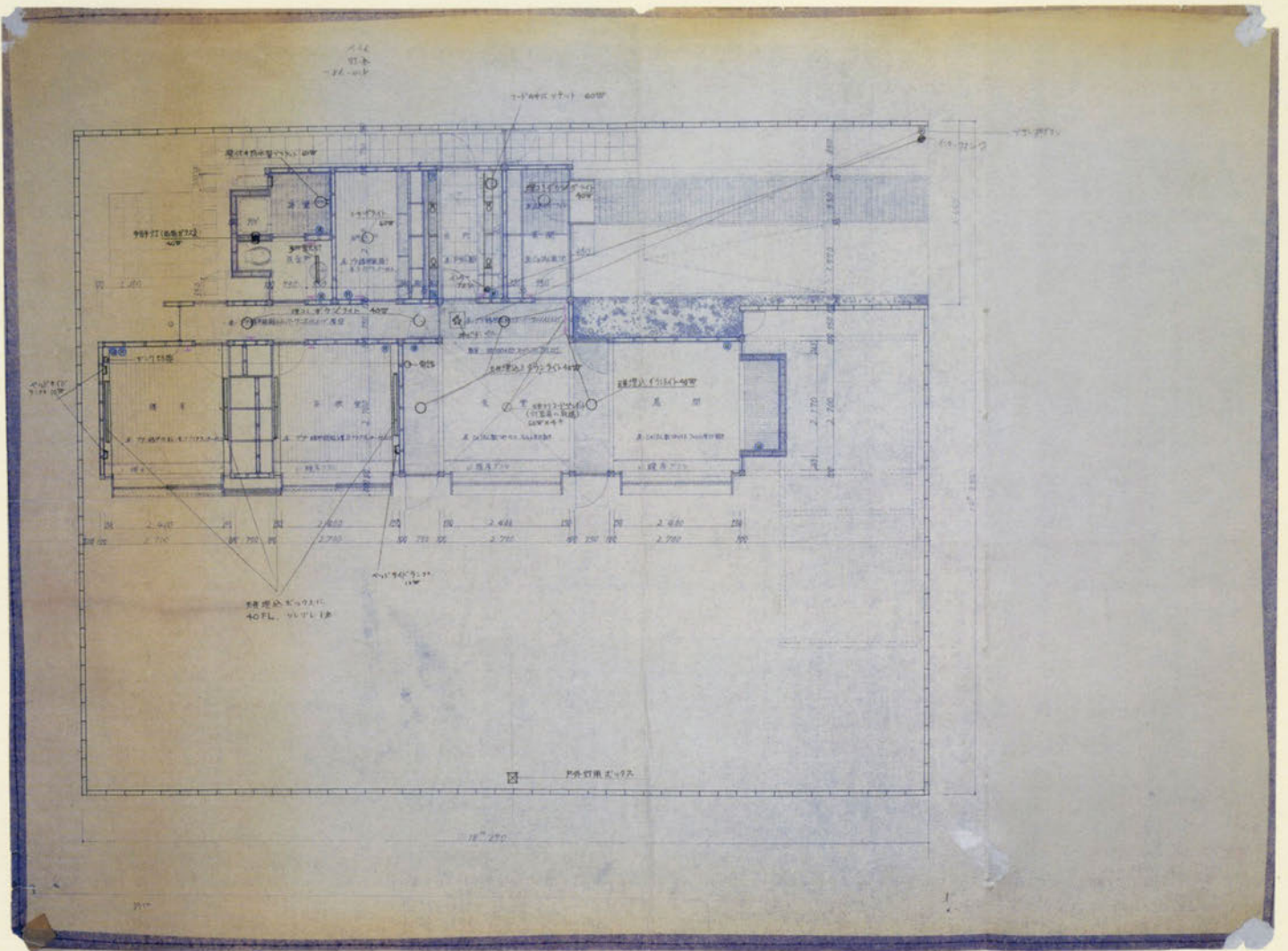
なぜそこまでしたかについては、先生が大学で学んだ頃、機能主義、合理主義の主張のもと、無駄の排除が善だったからという。「うまく1 cmでも縮まると、興奮

3 / 2階より1階増築部分の屋根を見る。屋根は扁平なピラミッドゆえ、地上からは目に入らない。
4 / 増築された2階へ上がる階段。

7 / 2階の洗面所と風呂。ここまでしなくても、と思うほどの突き詰めぶり。



現代住宅 併走 Hozumi Nobuo x Fujimori Terunobu



1/150

してゾクゾクしたものです」

この言葉聞いて、最小限住宅とか極限設計とかが叫ばれていた戦後すぐの、時代の空気を初めて吸った気がした。

経済的に無駄を省こうというより、思想として無駄を省きたかった。

もちろん、建築家なら誰でも知るように、ギリギリ切り詰めてもそれだけではいけない。この点についておもしろい言い方をされた。「でも粋でなくちやいけない、頓智がないと」

粋と頓智がただの箱と空間を分けるのか——わかったようなわからないようなモヤモヤした気分。白いソファに腰を沈め、窓の外に目をやって初めて気づいた。

窓が嵌め殺し！

空間単位ひとつに付く大きな一枚ガラスが、なんと嵌め殺しになっている。まだ家庭用空調のない時代、住宅の中心的窓の嵌め殺しなんて乱暴きわまりない。左右の縦長の窓も嵌め殺し。

「通風が悪いって、家族には不評でねえ」

マアそうだろう。でも、通風という実用性を捨てても、窓を嵌め殺しにした効果は大きく、外の光景がスッキリ気持ちよく見える。「粋」の意味がやっと具体的にわかった。捨てるところは捨て、ねらったポイントは実用上の欠点があっても大胆に細心に実現してしまう。ひとつの空間単位の面積は2

・7m四方、つまり畳でいうと4畳半。高さは2・2m。この寸法は方丈の庵に重なる。方丈とは10尺四方を指すが、物や生活用品を実際に並べると、使える面積は9尺四方の4畳半だったといわれる。

ソ

ファに座っていて感じる心地よさはこの寸法から来ているにちがいない。座って半畳、寝て1畳、両手両足伸ばして2畳。そして、ひとりであるなら4畳半、人が集まるなら三間四方の九間。これが日本古来の心地よい身体尺だった。

日本だけでなく世界中どこにも変わらない、と故・吉村順三は断言していた。

冒頭、「基本単位を並べた家」と見た目で言ったが、本当に収納を除いて4畳半という建築の基本単位の空間だったのだ。

私の知る限り、この単位を並べて生まれた住宅はない。

基本単位の寸法をベースに無駄を削ぎ落とし、インテリアはさわやかに仕上げ、加えて外もスッキリ見える、そして、この単位が並んでひとつの全体となる。

箱でないとするとなんだろう。

これは結晶の姿ではあるまいか。窓の外的光景を眺めたときのスッキリした印象も、もし水晶の中から外を見ることができればそう見えるだろう。

先生は、われわれの取材のため、サリーネンの1本脚の名作家具として知られる「チューリップアー

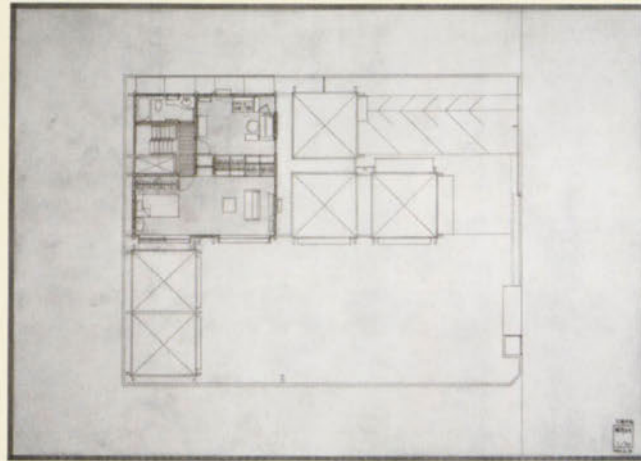
自邸

H Residence

建築概要

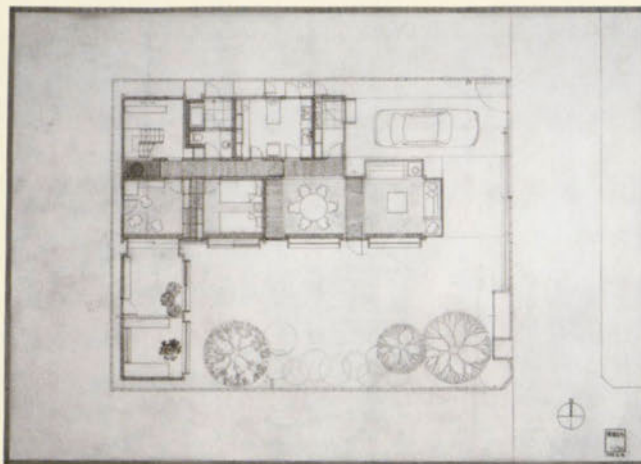
所在地	東京都新宿区
主要用途	専用住宅
設計	穂積信夫
施工	坂本寿男工務店
敷地面積	252㎡
建築面積	(竣工時)66㎡ (増改築後)101㎡
延床面積	(竣工時)66㎡ (増改築後)141㎡
階数	(竣工時)地上1階 (増改築後)地上2階
構造	木造
設計期間	(竣工時) 1967年1月~6月
施工期間	(竣工時) 1967年11月~1968年4月

増改築後平面図



2F

1980年



1F

1971年

1/350



「ムチエア」と「ペダスタルテーブル」をわざわざ購入して置いてくださった。若き日、製図台に向かう先生の背中側で、サーリネンが繰り返しモックアップに手を加えて完成させた家具だという。

世界広しといえど、これほどこの家具が似合う空間もないだろう。昼食をいただいたとき、白大理石にしようゆを一滴こぼしてしまっただが。

併住現代 住宅

Hozumi Nobuo × Fujimori Terunobu

8/このあたりはかつて庭付き一戸建てが郊外住宅地として出現し、先生が移った頃もそうだった。邸宅を分譲した土地ゆえ、大きな庭石があり、それが今も庭に鎮座している。

穂積 信夫

Hozumi Nobuo

ほづみ のぶお/1927年東京に生まれる。祖父は、コンドルの愛弟子として、また丸ビル的设计者として日本近代建築史に名を刻む桜井小太郎。50年早稲田大学卒業後、ハーバード大学に学び、卒業後、サーリネンの設計事務所に入り、最盛期のサーリネンのもとで、ケビン ローチやシーザー ペリと共に働く。寡作ではあるが、密度の濃い設計で知られ、「田野畑中学校および寄宿舎」(76/日本建築学会作品賞)、「早稲田大学本庄高等学院」(83)などがある。早稲田大学名誉教授。



藤森 照信

Fujimori Terunobu

ふじもり てるのぶ/建築史家。工学院大学教授。東京大学名誉教授。専門は日本近現代建築史、自然建築デザイン。おもな受賞=「明治の東京計画」(岩波書店)で毎日出版文化賞、「建築探偵の冒険 東京篇」(筑摩書房)で日本デザイン文化賞 サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸 (ニラハウス)」(97)で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000)で日本建築学会作品賞など。



使いやすく、管理しやすい、分散集中型トイレ



外壁

写真上／南側全景。右／外壁は有田の施釉磁器タイル。窯で焼いた力強さを表現。60×227mmの2丁掛。(写真2点／篠澤建築写真事務所)

写真左／エントランスロビー。木材加工が盛んな伊万里の木材を使用。外観の力強さに対して、自然素材のやさしさとあたたかみを表している。(写真／篠澤建築写真事務所)

エントランス

近年、地域医療の向上を目指し、地方自治体が運営する公立病院の再編や統合計画が全国的に進んでいる。今年3月に開院した「伊万里有田共立病院」はその先進例で、老朽化した伊万里市立市民病院と有田共立病院のふたつを統合し、両市街のほぼ中間にあたる佐賀県有田町北部に新たに建設されたもの。建物は地下1階、地上4階建てで、病床数は206床、設計は日建設計・石橋建築設計業務特別共同企業体。

現地を訪れると、外観は 一般的な白い箱形の病院とは打って変わった、レンガ色のタイル張り。設計を担当した日建設計設計室・主管の北川正仁さんによれば、独特の表情のあるタイルは有田の窯で焼いた施釉磁器製で、佐賀県西部地域の医療を力強く支えていくことを表現したという。方、内部に 歩入ると、木材加工が盛んな伊万里の角材をふんだんに使用した、あたたかみのある空間が広がる。

看護しやすく

安心感のある病棟

設計の第1のポイントは、土地の形状を非常にうまく生かしている点。もともと敷地周辺は棚田だったため、途中から

段高くなっており、約5mほどのレベル差がある。これを均すのではなく、なるべく元の地形をうまく生かすことによつて、外来患者や見舞客は1階から、職員や給食などのサービス業者は地下の通用品からアプローチができて、おのずと動線分離が明確になっている。

もうひとつ特徴的なのが、2〜3階の一般病棟のプランで、図面を見ればおわかりのとおり、L形ユニットを4つ組み合わせた井桁のような形をしている。

この4ユニットからなる井桁プランには多くのメリットがある。たとえば、メインのスタッフステーションは重症患者用ベッドゾーンの向かいにあたるコア部分の両サイドに配し、それ以外に井桁の4つの交点近くにサテライトステーションを配置してあるが、これによつて看護が行き届きやすく、かつ患者の安心感も増す病棟を実現している。

北川さんいわく、「じつは10年ほど前に入院して、ステーション前の病室に入ったんですが、看護師さんの声が聞こえるだけでも、けっこう心の支えになるんですよ。そういうことから考えた部分もありますね」。

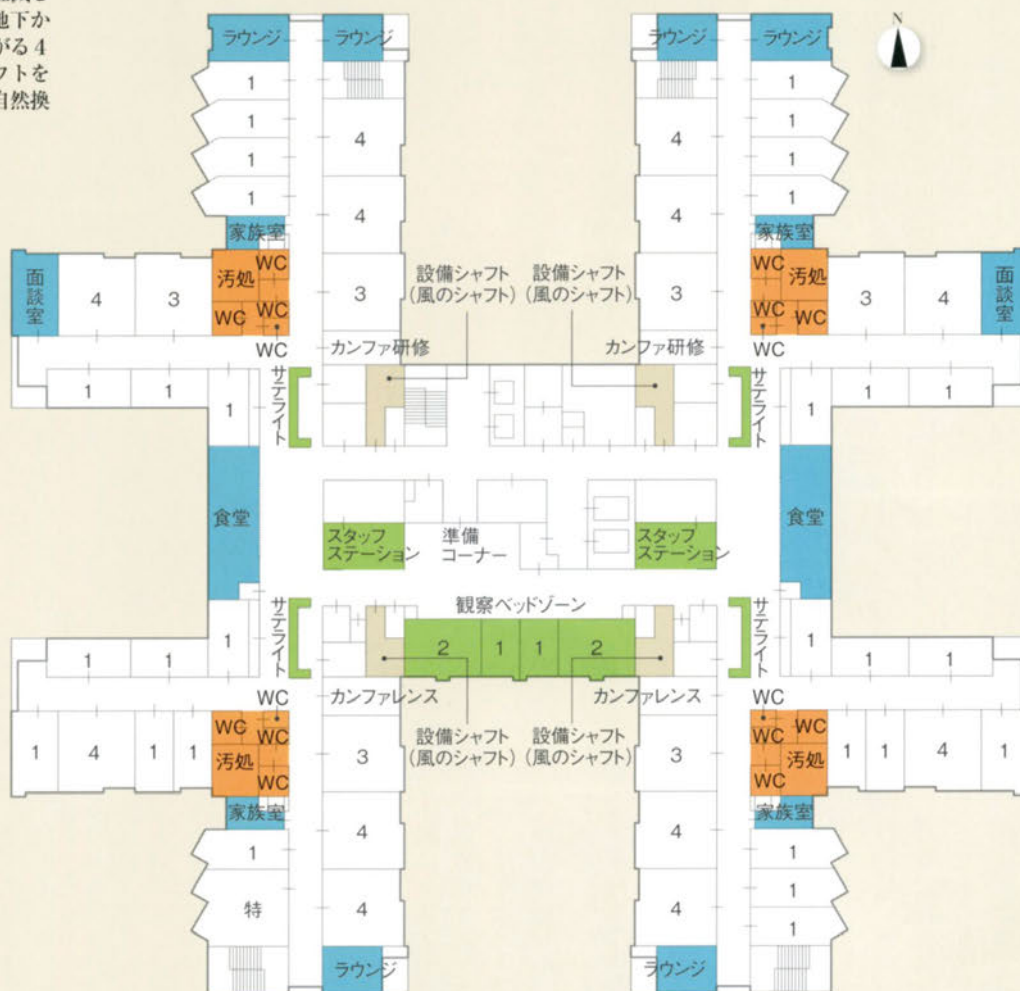
また、将来の病棟再編時に、ユニットごとに専門病棟として特化させるなど、

一般病棟平面図

0 5 10m

1/600

井桁形状の4ユニットからなる一般病棟。2カ所のスタッフステーションに隣接してサテライトを配置。病室までの距離を短く、看護師の移動負担を軽減している。また、地下から屋上までつながる4カ所の設備シャフトを生かし、各階を自然換気している。



4床室用女子トイレ

各ユニットごとに、男子2ブース、女子2ブース（多機能トイレ各1）の同一プラン。



病室（4床室）

向かい合うベッドを30cm横にずらして、起き上がったときに視線が交差しないように配慮。



オストメイト対応多機能男子トイレ

写真上／オストメイト対応流しのある男子トイレ。左奥に汚物処理室。従来の汚物流しは洗浄水量が16L必要だったが、6Lの節水型ができ、採用された。使用量の多い病院として節水効果は絶大だ。



4床室用分散集中型トイレは、各室からすぐに移動できる距離にありながら、音、におい、気配などが気にならず、プライバシーが確保された。

1/200

次に、病棟のトイレも、L字ユニットの角に計4カ所設けられている。どの4床室からもほど近く、これなら病室内にトイレがなくても十分、許容範囲だろう。内部は男女とも2ブースずつ、オフィスの多機能トイレ並みの広いスペースを確保、その奥に男女どちらのトイレからも行ける汚物処理室がつながっている。トイレは検尿の場を兼ねているため、患者が自分で汚物処理室内の検尿置き場に

分散集中型トイレで4床室のプライバシーを確保

実際に病棟を見学すると、井桁状に延びた各廊下の突き当たりからは四方に広がる山並みや町の風景が望め、東西2カ所にあるオープンな食堂の開口部からも自然光が射し込んでくるため、全体に明るく開放的な印象。各病室もそれぞれに景色が楽しめ、居心地がよさそうだ。井桁プランは自然光を取り込みやすい点もメリットといえるだろう。

写真左／廊下側から見た4床室用トイレ。左右にブース。その奥に汚物処理室があるので、検尿時などにも便利。

病棟の区分けがしやすいだけでなく、設備シャフトもそれぞれ独立しているため、改修の際にもユニットずつ、順次、工事が行える。

ちなみに、設備シャフトは井桁の交点

部分の4カ所、地下1階から屋上まで貫通しており、屋上には風光によって回転し風を誘引できる排気ベンチレーターが設置され、自然換気を行っている。これ以外にも、メンテナンスピットの熱利用など自然の力をできるだけ活用し、省エネルギーに配慮した点も設計のポイントのひとつといえる。



1階外来用トイレの洗面器。伊万里市 有田町ともに磁器の産地であることを生かした、有田の窯元の特注品。写真は男子トイレの洗面器。

このほか、医療スタッフ用手洗器にも

さらに、注目は各病室に設置した洗面器。一般的な病院の病室にある洗面器というと、両側が壁に付いたカウンター式で、水栓もカウンターから立ち上がったタイプが多いが、これだと壁との境目や水栓の根元が汚れやすく、掃除もしにくいことから、壁から独立し、かつ水栓も壁出しのオリジナルデザインを特注したもの。病室では水をためる必要もないため、細菌が繁殖しやすいオーバーフロー用の穴もなくし、物を置いて不衛生になりがちな脇の平場部分も最小限にした。病院設計だからというより、普段の生活のなかで感じていることがヒントになったと北川さんは語る。

また、床の清掃性を考慮し、便器は大小ともに壁掛け型を採用している。

節水性で画期的なのは、汚物処理室に備えた汚物流し。日進月歩の一般的な節水型大便器の開発に比べ、後れをとっていたが、ようやくTOTOから1回の洗浄水量が6Lの待望の新製品が出たため、採用したという。以前の製品は16Lだったというから、節水効果はかなり期待できそうだ。

行きやすいようにと考えたプランだ。

日建設計設備設計部の片岡えりさんに

水まわり機器選びのポイントをうかがうと、重視したのは節水性と清掃性・衛生面とのこと。

伊万里有田 共立病院

建築概要

所在地	佐賀県西松浦有田町二ノ瀬860
主要用途	病院
事業主	伊万里・有田地区医療福祉組合
設計	日建設計 石橋建築 設計業務特別共同企業体
施工(建築)	青木あすなろ建設 下建設共同企業体
(衛生)	九電工・シンセイ共同企業体
敷地面積	28,755.51㎡
建築面積	6,547.06㎡
延床面積	17,031.62㎡
構造	鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
階数	地下1階、地上4階
駐車台数	400台
設計期間	2008年11月～2010年2月
施工期間	2010年7月～2012年1月
開院	2012年3月1日
病床数	206床 (一般病床202床、感染症病床4床)

おもなTOTO使用機器

1階外来フロア

男子トイレ	大便器/C550SU+TCF4521EV81 小便器/UFS800CE 洗面器/有田焼特殊品 +TEN22ARX
女子トイレ	大便器/C550SU+TCF4521EV81 洗面器/有田焼特殊品 +TEN22ARX

2～3階病室フロア

男子トイレ	大便器/C550SU+TCF4521EV81 オストメイト対応流し/UAS71RNG
女子トイレ	大便器/C550SU+TCF4521EV81 オストメイト対応流し/UAS71RNG

病室	洗面器/MP特+TEL121AS
----	------------------

汚物処理室	汚物流し/SK330C
-------	-------------

1～3階医療スタッフエリア	手洗器/SK500V1+TEN582X 他
---------------	-----------------------



オストメイト対応多機能女子トイレ

写真上/オストメイト対応流しのある女子トイレ。中/病室の洗面器は左右の壁から離し、水栓も壁出し。こうすることで清潔を保ち、清掃もしやすい。車いすにも対応。下/医療

スタッフ用手洗器は、肘までしっかり洗える掃除・洗濯用のマルチシンクを転用。水栓は手術室で使用される手かざしセンサー式を組み合わせた。



病室洗面器

工夫が見られる。たとえば、処置を行った後、しっかりと手を洗いたい場所には、水が飛び散りにくく、腕まで洗いやすい形状を考え、掃除・洗濯用のマルチシンクを転用。水栓は手術室で用いられる手かざしセンサー式を組み合わせた。「看護師さんなど医療スタッフは院内感染対策のため、頻繁に手を洗うので、しっかりと洗う、こまめにさっと洗うといった用途に合わせて、手洗器の形状を選びました」とは片岡さんの弁。

北川さんによれば、病棟のトイレは各病室内に設けられた例もいまだに多く見受けられるが、大部屋の場合、音にお



医療スタッフ用手洗器

いの問題だけでなく、前に誰が使用したかわかると次に行きづらいといったプライバシーの問題もあるため、ここでは分散集中型を採用したという。

北川さんはこのほかにも、自身の経験をもとに、プライバシーを考慮して4床室の向かい合うベッドの位置をずらしたり、入院患者が見舞客と気がねなく過ごせるよう、随所に交流の場を設けるなど、さまざまな配慮を設計に盛り込んでいる。そうした細やかな気配りの集積が、今後、病院の居心地につながっていくにちがいない。



日建設計 設計部門設計室 主管

北川正仁
Kitagawa Masahito



日建設計 設備設計部門設備設計部

片岡えり
Kataoka Eri

デザインが勝負

選ばれた建築家を生かして

代表取締役社長 尾崎眞平 さん

名古屋は「日本」の戸建て住宅市場」なのだという。濃尾平野の中央に位置し、都市部周辺の土地に極端な価格の差がないといった地理的地形的要因に加えて、「住むなら戸建て」という風潮が強い。その結果、戸建て着工数は長く全国1位だそう
で、平成22（2010）年度の国土交通省の建築着工統計でも、全国約31万戸の持ち家着工数のうち、2万3500余戸の愛知県は東京や大阪をしのいでトップの座にある。県南の蒲郡で生まれ育った尾崎眞平社長は、そうした事情を熟知していたため、起業の際、迷わず本拠を名古屋に決めた。欧倫ホーム創業の1998年のことである。

デザイン最優先でいい家を作る

「デザインがないと、人は死んでしまうと思っていますから」と笑う尾崎さんの信念とあっていいのだろう。欧倫ホームの大きな特徴は、建築家とともにつくるデザイン性の高い「カッコいい家」だ。ネットや雑誌をチェックして見つけた6〜8人の建築家と外部委託契約を交わし、

欧倫ホームで家を作りたい人に紹介する。だが、後は建築家まかせというわけではない。

「デザインにはすべて根拠が必要。なぜそうするとかっことよくなるか、論理的に説明できないとダメ」の言葉からもわかるように、設計段階でも積極的に欧倫側がかかわっていく。デザイン面だけでなく、通風・採光といった機能面から使い勝手や暮らしやすさ、法規、構造、施工精度の問題に至るまで細かくチェックするシステムが出来上がっている。「建築家とは対等な付き合いをお願いしている」から、建築家からの提案であっても、修正、手直しが加えられる。この段階で、生産側のノウハウも反映され、建設コストは70万〜80万円/坪程度に抑えられる。建築家が好きに挑んで施工側の利益が出ない、という事態はここで回避される仕組みである。

「特注」をなくしコストを抑える

では、コストを抑えるために、チェックの段階で建築家の設計は標準化されていくのか。じつ

はそこにも欧倫ホームの、いや尾崎さんの独特の発想がある。「今は世界中を探せば、いろんな建材や材料があるし、ほとんどの寸法のもが手に入る。だから安易に『特注』せず、探しまわってもらいます」

こだわりがあつてその材料や寸法を採用するのだから、こだわりをもつて探せということだ。そのための後押しは厭わない。尾崎さん自身も、建築家やスタッフとともに世界の建材展・デザイン展に出かけ、いいものがあれば買いつけてくる。「最近は何ランドやルーマニアのものもいいんです。よく勉強していいセンスもい。フランスやイタリアのものよりいいかもしれない」といった発言がさらさらと出てくるのも、日頃の情報収集の成果だろう。結果として、こだわりの部分も「既成品」で納めることが可能となり、標準化しなくてもコストは抑えられる。設計意図の実現とコスト抑制を両立する秘訣がそこにある。

増税後の社会を見据えた布石

欧倫ホームは、現在年間95棟





Housing Company

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、
それぞれの土地柄、会社の性格、
そして会社をリードする人物の性格、
マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。



日進梅森展示場モデルハウス外観。全面ガラス張りの1階は、住宅というより店舗の雰囲気に近い。外からでも、室内のイメージがわかり、また入りやすさも生み出している。

ほどを受注する。効果的なテレ
ビCMや積極的なサイトの運営
により知名度を高め、創業14年
にして、すでに地域ビルダーと
して、定の地位を築いていると
いえるだろう。全国展開も視野
に入れるが、尾崎さんが現在力
を注いでいるのは、新築住宅以
外での事業展開。ひとつはリノ



AURING Ozaki Shinpei

尾崎眞平（おさき・しんぺい）／1955年愛知県生まれ。78年日本大学工学部建築学科卒業。地元ゼネコンの現場監督からスタートし、ハウスメーカーで営業のナンバーワンとなる。その後、大手マンションメーカーのデザイナーズ・マンションで、デザインを学ぶ。98年、神戸製鋼グループ、大丸装工業事業部、三輪の3社のコラボレーションにより、新しい注文住宅を提供するため、欧倫ホーム名古屋を設立。代表取締役社長に就任。99年商号を欧倫ホームに変更。「オンリーワンの個性的注文住宅と戸建てリノベーションで、全国制覇を目指す」という。

ベーション市場での展開であり、
もうひとつは中国での内装事業
への参入である。
中古住宅を買い取って再生さ
せるリノベーション事業は、す
でに愛知県内で展開している。
中国進出はこれからだが、進
出して失敗した日本企業にも学
びながら、多能工の職人たちを

派遣してマンションの内装工
事を請け負う計画であるという。
「小さな会社ですから、生き残
るために何本もの柱をもってい
たい」という尾崎さんの目は、
日本全国、さらに世界の動きを
にらみながら、すでに増税後の
社会を見据えている。

取材文／市川幹朗 写真／川辺明伸

AURING

欧倫ホーム
本社所在地

愛知県名古屋
市名東区貴船3-206

電話 052(704)2226

代表取締役社長

尾崎眞平

会社設立 1998年

従業員数 48名

事業内容 注文住宅

分譲住宅

土地活用

リノベーション事業

売上高 30億円

(2010年6月期)

URL www.auring.co.jp

日進梅森展示場

TOTO使用機器

1階トイレ カウンター すずり



写真下／欧倫ホーム日進梅
森展示場モデルハウス内観。
右ページ右から順に、1階
LDK、ギャラリー風の階段
踊り場、トイレ、テーブル
使用を前提とした和室。欧
倫ホームは、完全注文住宅
のため、基本となるモデル
がつくれない。そこで、こ
こでは複数の建築家のテイ
ストを一軒の家の中に散り
ばめ、雰囲気の一部分が伝わ
るようになっている。モデル
ハウスというより、ショール
ーム的なイメージだ。広
場のような踊り場や、テー
ブル使用の和室などの思い
切った提案は、訪れる人を
楽しませ、打ち合わせス
ペースや打ち合わせ中の子
どもの遊び場にもなる。写真
上／2階吹抜けに面して立
つ代表取締役社長の尾崎さ
ん。

次回予告

スタジオ・ムンバイ展 Praxis (仮)

現代インド建築界を代表する建築家、ビジョイ ジェイン氏率いるスタジオ ムンバイ。伝統的技術や熟練した職人技術を現代に結びつけることで生まれる、インドの原風景が息づく作品を紹介。スケッチ、模型、素材などから、その作品性、氏の思想までを紐解きます。

会期 2012年7月12日(木)～
9月22日(土)
講演会 7月12日(木)／津田ホール
※事前申し込み制
詳細は5月中旬、
TOTOギャラリー 間
ウェブサイトをご覧ください。

TOTOギャラリー・間

所在地 東京都港区
南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3階
電話 03(3402)1010
ファクス 03(3423)4085
開館時間 11:00～18:00
(金曜日のみ11:00～19:00)
休館日 日曜日 月曜日 祝日、
および展示替え期間、
夏期休暇8月12日(日)～
20日(月)(予定)
入場料 無料
アクセス ●東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車
3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車
7番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車
4a番出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線
半蔵門線、都営地下鉄
大江戸線「青山一丁目」駅
下車4番出口徒歩7分

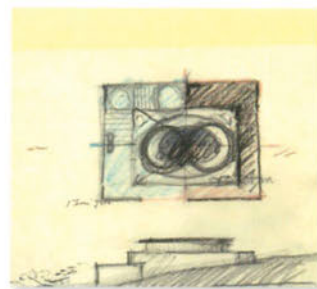


www.toto.co.jp/gallerma/

TOTOギャラリー・間で展覧会をします

Jun Itami Vestigial Impressions

いたみ・じゅん／1937年東京都生まれ。64年武蔵工業大学工学部建築学科卒業。68年伊丹潤建築研究所設立。2006年伊丹潤 アーキテクト新設。09年より済州国際英語教育都市マスターアーキテクト就任。11年6月逝去。おもな受賞＝05年フランス共和国芸術文化勲章「シュヴァリエ」、06年金壽根文化賞、アジア文化 景観賞(国連人間住居計画 UN-habitat主催)、08年韓国建築文化大賞優秀賞、10年村野藤吾賞など。



韓国 済州島／2006

水の空間は、その地域の土着の素材を獲得し、四角い強靱な立方体に楕円形をえくり、空の動きを水面に映すこと。
文／伊丹潤

三つの美術館「水」

る韓国での 連のプロジェクトまで、40年間の代表作をスケッチやドローイング、写真などを交えて紹介すると共に、生前のインタビュや書斎机なども展示する。骨董の壺の中に無造作に投げ込まれた筆記用具、硯箱などに伊丹建築の初源を見ることができらる。そこから生み出されたスケッチには、伊丹の感性が目の前にある物にじかにぶつけられている。彼は一枚の図面ですら伝達媒体ではなく、絵画のように扱い、完成された世界を創造する。これは、かつて建築家ではなく、芸術家を志したこともある彼の宿命であろうか。建築を創造するプロセスのなかで彼はつねに語っていた。「強靱な祈りを込めた造形感覚と自由な思想が基底になくは、真のビュアリティは成り立たない」と。今やコンピュータ上で図面を描くことがあたりまえの世代にとって、スケッチやドローイングは建築の形体を決定する手段のひとつにすぎないが、伊丹の手の痕跡からは、その枠を超えた祈りのような力を感じることが出来る。そして、スケッチに遺された、迷走のなから脱出するかのような手の動きは、伊丹の建築思想を読み解くひとつのヒントとなる。

今回の展覧会からは、伊丹潤がどのような建築をつくってきたかではなく、なぜこのような建築の世界を創造することができたのか、その答えを探求していただきたい。そして、その「手の痕跡」から、伊丹の建築を肌で感じ取っていただければ本望である。

Information

Symposium

「伊丹潤・ひらかれる手」



TOTOの最新情報

TOTO News 1

インドに衛生陶器工場を建設

TOTOグループでは、長期ビジョン「TOTO Vプラン2017」において、海外住設事業を柱のひとつに据え、事業基盤を確立している北中米、中国、アジアに続き、ブラジル、インドなどを今後の新規参入マーケットとして位置付けています。

成長の期待されるそのインド市場には2011年1月に現地法人「TOTO India」を設立。

今回さらなる事業拡大のため、グジャラート州に衛生陶器工場を建設します。この「グジャラート工場」は2012年3月に着工、2013年12月竣工、2014年7月からの本格稼働を目指します。Vプランで掲げた海外売上高1,500億円達成に向け、新たな挑戦が始まります。



TOTO News 2

2012ミラノサローネ
国際家具見本市に出展

TOTOは、イタリアのミラノで4月17日～22日に開催される、世界最大級の国際家具見本市「2012ミラノサローネ」に出展します。会場は2010年と同じ本会場「ロー・フィエラ・ミラノ」で、約153㎡の展示スペース。2011年ヨーロッパで発売した新シリーズNEOREST（ネオレスト）／MHシリーズや、浴槽まわりの家具収納を新アイテムとして備えたLEシリーズなどを、スイート空間として展示します。また、ロシアで2011年から販売しているNEOREST（ネオレスト）Aの単品と、JEWELHEX

（ジュエレックス）シリーズのスイート空間をサローネで初めて展示します。そのほか、ブースの外からも、シャワーの開閉や温度調節ができるシャワーブース「NEOREST SHOWER CABIN（ネオレストシャワーキャビン）」も展示、これには節水技術のひとつであるエアインシャワーが搭載されています。

開催期間：2012年4月17日（火）～22日（日）
開催場所：ロー フィエラ ミラノ
TOTO出展面積：約153㎡（パビリオン22内）
参加企業：168社（イタリア国内：155社、イタリア以外13社／2010年度）
来場者数：約30万人（2010年度）
URL：www.milanosalone.jp/fiera/bagno/gaiyou/

TOTO News 3

第7回TOTO水環境基金
助成団体決定

環境ビジョン「TOTO GREEN CHALLENGE」の一環として、第7回目となる「TOTO水環境基金」の助成団体を決定、16団体に合計980万円を助成いたします。

TOTO水環境基金は、2005年に「水環境の再生・保全」を目的に設立され、これまでに延べ97団体の活動に対して総額1億3,754万円の助成を行ってきました。

TOTOグループでは、地球環境に貢献するボランティア活動を「グリーンボランティア」と称し、グループ社員の参加を促進しています。本基金の助成団体の活動においても、積極的にボランティアを募る予定です。環境保全活動への参加を通じて、環境意識の高い人づくりを進めるとともに、地域との共生を目指しています。

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など
知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

cera trading news

B Book

TOTO出版

CERA
TRADING

TOTO出版のお知らせ

セラのお知らせ



book 1

『グローバル・エンズ： 始まりに向けて』

世界の非中心（グローバル・エンズ）の建築家7組の拠点と作品をめぐる旅を通じて、新たな時代の始まりに向けた建築の可能性を探ります。掲載建築家は、トム・クンディグ（アメリカ）、石上純也（日本）、ケリー・ヒル（シンガポール）、ショーン・ゴッドセル（オーストラリア）、スミルハン・ラディック（チリ）、パウロ・ダヴィッド（ポルトガル）、RCR（スペイン）。

●著者/ケン タダシ オオシマ
●定価/3,150円(3,000円+税)
●体裁/A5判 ハードカバー
352ページ 和英併記

book 2

『地球のごはん 世界30か国80人の “いただきます!”』

ロングセラー「地球家族」シリーズ第4弾!さまざまな国と地域に暮らすふつうの人々80人のある日の「ごはん」を撮影し、ポートレートとともに、摂取カロリー別に紹介。食事内容が物語るそれぞれの人生とは?多様な食の風景から見えてくる社会の姿とは?「食」という切り口から人々の生き様を描くとともに、現代社会が抱えるさまざまな問題や様相を浮き彫りにする、ユニークなドキュメンタリー。

●著者/ピーター メンツェル+フェイス ダルージオ
●定価/3,150円(3,000円+税)
●体裁/A4判変型(304mm×228mm)
ソフトカバー 340ページ

book 3

『311 ゼロ地点から考える』

東日本大震災によって何が失われ何が引き起こされたのかを知ること、「ゼロ地点」に立ち返って建築的観点で何ができるかを考えること——TOTOギャラリー・間で開催された「311失われた街展」と、関連シンポジウム「311ゼロ地点から考える」を通して、311以降の建築家のあり方を考えます。

プレゼント

同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方の中から、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

●監修/内藤 廣 原 研哉
●編集/TOTOギャラリー 間
●定価/2,520円(2,400円+税)
●体裁/A5判 ハードカバー
226ページ

2012年新カタログ 「CERA CATALOGUE 2012」を発行しました

セラトレーディングでは、2012年の新商品を掲載した新カタログを発行しました。今回新しく加わった「SIN」(シン)シリーズは、ボルドーワインのボトルを連想させる官能的なデザインが魅力のキッチン水栓。

スイスの伝統的な職人技術を生かした高い品質に加え、時代の最先端に行く水栓を多数送り出してきたKWC社の最新商品です。そのほか、洗面器にはめずらしい三角形のフォルムが印象的な「STARCK」(スタルク)シリーズや、セラオリジナルのアクリルバスタブなど、魅力的な商品を多数ご用意しております。カタログのご請求は、セラトレーディングホームページ、または電話・ファクスにてお申し込みください。

写真上/「SIN」シリーズ水栓。下/「STARCK」シリーズ洗面器。



www.toto.co.jp/publishing

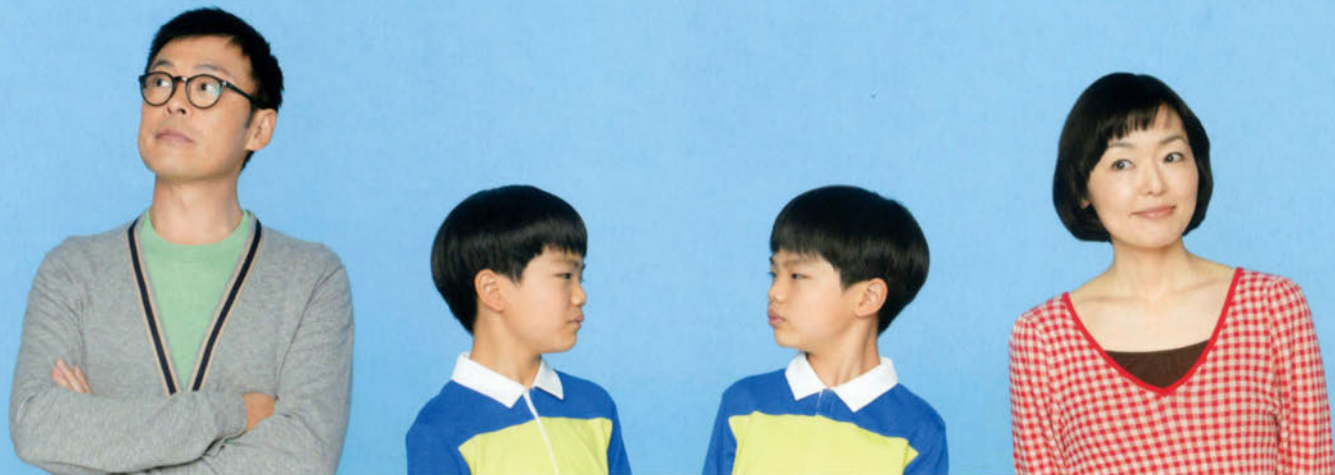
www.cera.co.jp

セラトレーディング	Bookshop TOTO	TOTO出版	地図
<p>●所在地/東京都港区 南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル 1階 地下1階 ●電話/03(3796)6151 ●ファクス/03(3402)7185 ●営業時間/10:00~18:00 ●定休日/日曜日 祝日 夏期休暇 年末年始</p>	<p>●所在地/東京都港区 南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階 ●電話/03(3402)1525 ●定休日/日曜日 月曜日 祝日「TOTOギャラリー 間」休館中の土曜日 夏期休暇 年末年始</p>	<p>●所在地/東京都港区 南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階 ●電話/03(3402)7138 ●ファクス/03(3402)7187 全国の書店でお求めください。 直営店Bookshop TOTOでも お求めになれます。書店遠隔 の方はお問い合わせください。</p>	

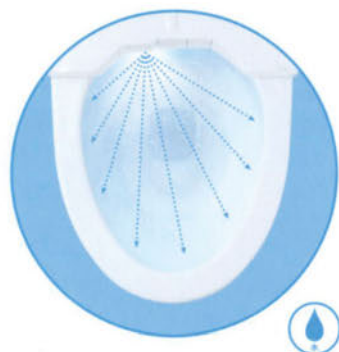
アクセス/●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分●東京メトロ銀座線 半蔵門線 都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

次号『TOTO通信』は2012年7月上旬発行の予定です。

トイレ、家族のだれが きれいにするの？



水が自分できれいにします。



使う前に

便器に近づくと、ミスト(水道水)を自動でふきかけ、汚れをつきにくく。



使った後に

「きれい除菌水」のミストを自動でふきかけ、見えない汚れや菌を99%分解・除菌^{※1}。



使っていない時にも

「きれい除菌水」のミストを自動でふきかけ、トイレのきれいが長持ち。

きれい除菌水のチカラです。



「きれい除菌水」は、水道水^{※3}に含まれる塩化物イオンを電気分解してつくられる、除菌成分を含む水です。

TOTOのトイレ

webでもっとくわしく。toto.co.jp

対象商品



NEOREST AH type



NEOREST RH type



ピュアレストEX +アブリコット

※1 [試験機関]:(財)北里環境科学センター [試験方法]:電解水の除菌効力試験 [除菌方法]:電解した水道水と菌液を混合し除菌効果を確認 [試験結果]:99%以上 (効果効能):「きれい除菌水」は、汚れを抑制するもので清掃不要になるものではありません。使用・環境条件(水質・便器形状など)によっては、効果が異なります。 ※2 [試験機関]:(財)日本食品分析センター [試験方法]:除菌効果試験 [除菌方法]:電解した水道水により洗浄 [対象部分]:便器ボウル面の便器洗浄部 [試験結果]:99%以上 ※3 水道水(水道法で定められた水)です。井戸水の場合、塩化物イオンが少ないため十分な効果が得られないことがあります。



商品についての技術的なお問い合わせ TEL.0570-01-1010 受付時間:平日9:00~18:00/土曜日9:00~17:00(日・祝日、夏期休暇、年末年始を除く) URL:www.com-et.com

TOTO通信のお届け先などの変更はお客さまNo.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999
*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(www.toto.co.jp/)をご覧ください。